

# 隆起線文土器瞥見

——関東地方出土当該土器群の型式学的位置——

大塚達朗

## はじめに

隆起線文土器は、現在、九州、四国、本州と疎密はあるにせよ広く分布している縄文草創期前半の土器型式であり、「縄紋最古と定った」<sup>1)</sup>とも言われた型式である。この見解を支持する研究者は多い。しかし、佐藤達夫は草創期前半の土器型式について、型式学的再検討を行い、隆起線文土器より古式の縄文土器を抽出している<sup>2)</sup>。この見解には方法論や土器資料の観察所見について反論が寄せられている。型式論とは別に、新資料による問題提起もある。麻生 優は泉福寺洞穴の「豆粒文土器」を最も古式と考えている<sup>3)</sup>。一方、先土器時代終末の「神子柴・長者久保文化」段階の後野や大平山元Ⅰの石器群に無文土器が伴うと報告され<sup>4)</sup>、支持されている<sup>5)</sup>。従ってこのような趨勢から、隆起線文土器が最古という評価は保留すべきかもしれない。

それにしても、資料的充実の度合いから見て、縄文土器の起源・初源形態を考えるのに隆起線文土器研究が有力な手掛かりを与えてくれることに変わりはないであろう。最近では、この土器群に縄文が利用されているという報告がある<sup>6)</sup>。

小論は、次章で述べる理由から、これまで縄文土器編年表に橋立以外登場することの少ない関東地方の隆起線文土器の特徴の把握と細分を試みて、全国編年への見通しを述べるのを目的とする。

## 1 問題の所在

隆起線文土器は何段階かに細分し得ることが、つとに指摘されている。全国的な編年は、小林達雄、佐藤達夫、白石浩之、鈴木保彦らが試みているが、それぞれに齟齬を来たしている。各人が用いる分類システムに原因があると言える。そこで彼らの型式細分の際の分類基準を検討する必要がある。

小林達雄は荷取洞穴の隆起線文土器資料を報告し、細分を試みた<sup>7)</sup>。小林は隆起線文が次第に細くなる傾向を変遷過程ととらえ、Ⅰ～Ⅴ段階を設定した。「隆起線文土器」(Ⅰ)、「細隆起線文土器」(Ⅱ・Ⅲ)、「微隆起線文土器」(Ⅳ・Ⅴ)と命名している。「細隆起線文土器」はより細いものとを区別し、「微隆起線文土器」は「ハ」の字形爪形文をもつ一ノ沢岩陰例を分離し終末に位置させている。「微隆起線文土器」は「篋状工具などを曳きずって工具の縁に粘土をはみ出して作ったも

の<sup>9)</sup>と、それ以前の段階の粘土紐の貼付とは隆線の作出技法が異なることを指摘している。「豆粒文土器」が報告されてからも、以前の細分案に似たものを持続させている<sup>9)</sup>。やはり、貼付される粘土紐の太さの変化に応じて、古い方に「キンメンのように幅広で平坦な類」（福井洞穴第3層、九合洞穴、柳又、田沢例）を考え、「細くてソウメン状」な隆線をもつ、橋立岩陰、小瀬ヶ沢洞穴、日向洞穴例を区別し、狐久保例を両者の中間に位置させている。以後微隆起線文土器2段階（石屋洞穴、荷取洞穴例／一ノ沢岩陰例）の変遷を想定している。この点も以前と同じである。また、隆線には直線的なもの他にジグザグなどの変化があることにも触れているが、後者の場合、どのような技法に由来するのか、詳しくは述べられていない。豆粒文土器については、小林は隆起線文土器の最も古い段階と考えている<sup>10)</sup>。

小林はかかる作業を通じて、「九州に出現した隆起線文系土器様式は、たちまち東北南部にまで波及する」<sup>11)</sup>と解釈し、北上説を唱えた。

佐藤達夫案<sup>12)</sup>も小林と分類基準は近い。やはり「太さの順序に従い」細分している。すなわち、「隆帯紋土器」（田沢、狐久保、九合洞穴、日向洞穴例）、「隆帯紋に隆線紋が伴うもの」（福井洞穴第3層、日向洞穴例）、「隆線紋土器」（上黒岩岩陰、狐久保例）、「細隆線紋土器」（酒呑ジュリナ、石小屋洞穴、小瀬ヶ沢洞穴、日向洞穴例）、「微隆線紋土器」（荷取洞穴、橋立岩陰、小瀬ヶ沢洞穴、日向洞穴、一ノ沢岩陰例）という順の変遷を考えている。「微隆線紋は篋状工具の横引きによって、その間に細い並行隆起線を生じるもの」<sup>13)</sup>とし、他を粘土紐の貼付と区別する点では、小林と共通する。ただし佐藤は「微隆線紋土器」を一段階として把握している。佐藤も「ハ」の字形爪形文を新しい要素として考えているが、この爪形文と同じ施文部には鋸歯状の細隆線、小波状隆起文を置くなどのヴァリエティを考えている。

このような編年作業から、佐藤は「西高東低というようなものではなく、西日本も東日本もほぼ同時か、むしろ東高西低のように見受けられる」<sup>14)</sup>とし、東高西低説を主張した。

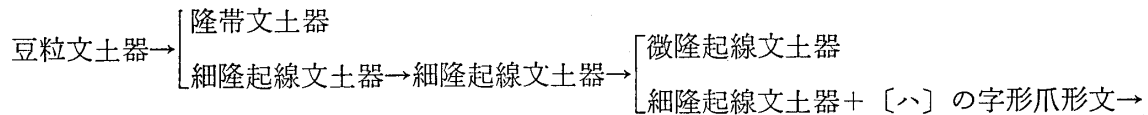
型式変遷の評価のくい違いもさることながら、実は両者の分類基準には説得的でないところがある。

例えば、佐藤は最古の段階の「隆帯紋土器」として、田沢、日向洞穴、狐久保、九合洞穴例を包括し、小林は福井洞穴第3層、九合洞穴、田沢例を「キンメンのように幅広で平坦な類」と一括するが、これらの土器に貼付された粘土紐はそのままではなく、色々と加工されており、その隆線文の施文技法（施文具も含めた）はみな同じという訳ではない。単に太さの類似によって判断するのは合理的ではないであろう。岡村道雄は同一個体でも施文部位によって太さが異なることを理由に、隆線の幅による分類に不賛成を表している<sup>15)</sup>。ただし岡村自身は如何に分類していくか具体的には触れていない。確かに、1個体内での隆線の形状には差異がある。そのままでは比較検討できない。そこで、どの隆起線文土器にも共通している施文部位を比較の基本に据えるべきである。それを前提にしての一地域での隆線の幅や太さによる分類は、隆線文の施文技法が同一の場合に意味をもつであろう。施文技法が異なる場合、太さが同一だからと言っても一時期に一括できることにはなら

### 隆起線文土器瞥見

ないであろう。逆に、太さが異なっても同一段階の可能性あることを考慮しなければならない。隆起線文土器の時期差、地域差を探る上で、以上のことに留意しなければならないと考えている。

小林とは違って、豆粒文土器を隆起線文土器型式とは別個の型式と考える白石浩之は、以下のよ  
うな編年案<sup>16)</sup>を発表している。



微隆起線文土器+〔ハ〕の字形爪形文→〔ハ〕の字形爪形文土器+押圧文土器(爪形文土器)

隆帯文土器は佐藤のそれに内容は近い。細隆起線文土器には3段階の変遷を設定しているようだが、どのような基準で細分しているのかよくわからない。別の論考で白石は泉福寺洞穴の資料の検討から、「豆粒文土器と隆起線文土器は相互に脈絡をもち、関連して変容してきたもの」<sup>17)</sup>と述べているが、泉福寺洞穴出土の隆起線文土器を白石自身の編年案のどれに対応させているのか不明である。

白石編年案も、小林案、佐藤案と同様に、細分案の各段階に対比される土器を、西日本・東日本の両地方に見い出しているのではない。そこに異なる変遷観が生みだされる余地がある。白石は、別稿で、細隆起線文土器は西日本・東日本両地方に存在するが、微隆起線文土器と、それに「ハ」の字形爪形文が組み合う例が西日本に検出されないことから、「微隆起線文が凌駕(東日本に一筆者註)している時期も、西日本から順次細隆起線文土器の強い波及があったものと考えられる。両者の土器に〔ハ〕の字形爪形文が附加される事実からも、ほぼ同時期に製作、使用されていたと思われる」<sup>18)</sup>と主張する。西日本からの波及を想定する点で小林の解釈に近い。果して「ハ」の字形爪形文を介してそのように理解できるのであろうか。白石の解釈の根底には関東地方の「ハ」の字形爪形文を併用する隆起線文土器(瀬戸遠蓮など)がある。したがって、関東地方の「ハ」の字形爪形文を併用する隆起線文土器の再検討が必要であろう。それと関係して、微隆起線文土器の内容も吟味しなければならない。

前3者に比べ、鈴木保彦は詳細に分類基準を設定している。今までの分類に関する問題点が集約されていると言えよう。

鈴木は以下のように分類している<sup>19)</sup>。

A 豆粒文土器

B 隆起線文土器

C 細隆起線文土器

(1) 太めの細隆起線を有するもの

a 細隆起線が波状を呈するもの

b 細隆起線が直線的なもの

b-1 細隆起線上に刻目等が施されるもの

- b—2 細隆起線上に刻目等の施されないもの
- (2) 細めの細隆起線を有するもの
  - a 細隆起線が波状を呈するもの
  - b 細隆起線が直線的なもの
    - b—1 細隆起線上に刻目等の施されるもの
    - b—2 細隆起線上に刻目等の施されないもの

D 微隆起線文土器

- (1) 口縁上部に装飾的文様を施すもの
  - a 口縁上部に1, 2条の粘土紐をめぐらし, この上に押しつぶしを加え, ジグザグ状の隆線としたもの, ないしは隆線上に刻目が施されたもの
  - b 口唇部に刻目を有するもの
- (2) 口縁上部に装飾的文様の施されないもの

E 「ハ」の字爪形微隆起線文土器

- (1) 口縁上部に隆起線がめぐり, その下部に爪形文が施されるもの
- (2) 口縁上部に「ハ」の字状の爪形文が施され, その下部に隆起線がめぐるもの

以上の如く分類し, A→B→C(1)→C(2)→D→Eと変遷すると考えている。鈴木は「隆起線文系土器の中でも, 前半に属するものの分布をみると, 最も古い豆粒文が九州北西部にあって, 次の段階の隆起線文土器は同じく九州北西部に二ヶ所, 岐阜県, 長野県, 新潟県に一ヶ所ずつと, 「細隆起線文土器の時期には関東, 中部, 東北南部の地域に広く分布している」<sup>20)</sup>ことから, 小林の北上説を支持している。しかし, こう解釈する根拠として, 各種土器の分布の偏在さ広域さをあげるだけでは充分とは思われない。逆に, 各地域での sequence が必ずしも把握されていない, その証拠ではなからうかと思う。各地域それぞれでの編年の確立, 他地域との連鎖が充分とは思われない。そこで, 鈴木の場合も, 編年の前提となる土器の分類基準を問い直さなければならないであろう。

鈴木のカテゴリ方法には, 従うべき点及び再考しなければならない部分がある。Cと言う分類に見られるように同一隆起線文技法に対応させて見ていく分類の仕方は, すでに記した理由から評価すべきであろう。ただし, Bの隆起線文土器との区別には明確さが欠けるきらいがある。またBに一括されている土器群は, 決して同一の技法によって粘土紐上に施文されているものではない。

さらに, 鈴木も「ハ」の字形爪形文をすべて微隆起線文段階の終末に置いているが, おかしな点がある。鈴木のエ(1)とした関東地方の瀬戸遠蓮, 地国穴台例は, 「ハ」の字形爪形文を除けば, 太さや技法からみて, 鈴木のカテゴリCの細隆起線文土器に対比すべき貼付隆起線文をもつ土器群のように思われる点がある。鈴木も小林や佐藤と同様に, 「ハ」の字形爪形文を新しい要素と考えこれを優先させて分類しているが, 瀬戸遠蓮例などは, 「ハ」の字形爪形文の時期的限定性について再考を促している資料ではなからうか。鈴木がこう考えるには, 篋状工具の押し引きによるものと, ごく細い粘土紐を貼付し整形したものを微隆起線土器に含めて考えている<sup>21)</sup>こともからんで

### 隆起線文土器瞥見

いるが、その正否も問題となろう。関東地方では確かに、後者の細い粘土紐を貼付し整形した隆線をもつ土器の方が比較的多く検出されているようである。



1



2

図1 文様帯を異にする隆起線文土器  
(1.なすな原 2.石小屋洞穴)

このように検討してみると、いくつかの問題点が指摘できる。一つは、関東地方の「ハ」の字形爪形文をもつ隆起線文土器の型式学的分類があいまいな点である。もう一つは、貼付隆起線文と工具を横に引いてはみ出した隆起線文をどう扱うか、分類していくかあいまいな点である。この2点の検討如何では、関東地方の編年を再考しなければならないであろうし、他地域との対比の意味あいも異なってくる筈である。すでに検討したように、隆起線文土器の中でも古式とされるものの位置づけの根拠が確たるものではないので、従来古式とされるものとの関係も組み変えることができるかもしれない。

### 2 関東地方の細隆起線文土器と微隆起線文土器

いささか唐突ではあるが、東京都なすな原遺跡出土土器(図1-1)と長野県石小屋洞穴出土土器(図1-2)の比較及び前後関係を考えることから始めたい。

この2例は、小林達雄の近著<sup>22)</sup>によって微隆起線文土器の代表例とされている土器である。石小屋洞穴例は、報告者である永峯光一が、施文技法について再説している<sup>23)</sup>。永峯によれば、皆、微細な粘土紐を貼付し整形したもので、口縁直下のジグ

ザグ状の隆線は棒状施文具で左傾する押し潰しが加えられたものとされている。一方、なすな原例は隆線を器面からつまみ出すように作り、上下の2条を指頭で押しあげ、押し下げして、ジグザグ状にし、中の1条は直線にしたものを3帯器面にめぐらした土器で<sup>24)</sup>、報告者は「細隆起線文土器」と呼んでいる<sup>25)</sup>。隆線作出技法が異なる一方、なすな原例は波状を呈する隆線が各帯に2本、計6本、直線的隆線は各帯1本、計3本で、石屋洞穴例は波状の隆線が2本、その下にまとまるようにして直線状の隆線が4本配されている。それぞれ、どの隆線に着目するかで評価が変わるかもしれない。現に、なすな原例は細隆起線文土器とも微隆起線文土器とも呼ばれていることからわかる。

石小屋洞穴例に検討を加えた永峯は、「細隆起線文の新しい段階とされる土器と微隆起線文土器とを比較すると、隆線が粘土紐の貼り付けによるとか、施文具を平行に引いた間にできた胎土のはみだしとかいう技法上のことや、またいわゆるミミズ腫れ状をなすかなささないかという状態だけでは、いずれとも判断しかねる資料の方が多い」ことから、「隆線そのものの形状で明瞭かつ解り易く区別できない点があるとすれば、細隆起線文と呼び、あるいは微隆起線文とする種類の範囲をずらせるか、または区別の指標を他の現象に求めた方が、よりよく土器自体の様相を理解できるのではないだろうか」と提言している<sup>26)</sup>。正に、なすな原例と石小屋洞穴例の比較は、かかる提言を踏まえた上でなされなければならないであろう。

まず観察上の視点、分類の際に土器のどこに注目すべきかに触れておく。

従来古式とか新しい段階とか言われる隆起線文土器を通覧すると、隆線を口縁に対して平行するようにめぐらすことでは共通している。しかし、この横走する隆線の本数は異なる。さらに、横走する隆線が配される部分が胴部に1帯ある土器、何帯かに別れている土器、施文部位が広く口縁下から胴部に数多く隆線を配する土器などがある。いわば明確な文様帯を有する土器とそうでない土器とに分かれるようである。そこで、文様帯の数に応じて1帯型、多帯化するものは多帯型とし、さらに細別して2帯型、3帯型と呼ぶことにするが、現在のところ4帯型とすべき土器は見あたらない。明確な文様帯を持たず、数多くの隆線を有する土器については多帯型と呼び区別しておく。

1帯型の場合、隆線の条数に応じて、1条型、2条型、3条型、4条型、多条型に細別しておく。多帯型の場合も同様に細別する。1帯型では、さらに、文様帯が口唇直下に配されるものと、口縁からやや下った所に配されるものがある。後者の場合、特に1帯多条型では、多条型と区別できにくい例もあるかもしれない。また、文様帯が口縁から下った位置にある土器と当該期の無文土器とは、口縁部片では区別がつけにくい。

隆起線文土器には工具を用いて口唇部に刻みを施したり、工具で押し潰したり、口唇を指でつまんでひねったり、指頭で押し潰したりして装飾的な文様を施す場合がある。これは文様帯として独自には扱わない。時として文様帯の一部を構成する場合もあるが、多帯型に限られる。

以上から、石小屋洞穴例(図1-2)は1帯4条型、なすな原例(図1-1)は3帯3条型と分類命名できる。関東地方には両型式に通ずる例が存在している。

埼玉県橋立岩陰<sup>27)</sup>にはなすな原例に類似した土器が検出されている。図2-2は口唇部を押圧し

### 隆起線文土器瞥見

波状にし、次に直線的な隆線を配し、その下にまた押圧を加えて波状にした隆線を配している。この口縁部片では隆線は貼付によるようである。恐らくこれはなすな原例(図1—1)の最上部の文様帯に対比すべきであろう。文様構成(≡≡≡)はそっくりである。図2—1, 3~4, 6~8は、これと違って1帯型として分類すべきであろう。図2—1は胴部に6条の隆線を配している。工具を横に引いてはみ出した隆線のようなものである。いわば、1帯多条型である。石小屋洞穴例(図1—2)に比して胴部の文様帯の隆線は細くかつ本数も多い。口縁部の装飾として細い隆線が鋸歯状に貼付されている。佐藤達夫が既に指摘したように<sup>28)</sup>石小屋洞穴例の口縁部装飾の波状の隆線と関係するものであろう。口縁下やや下った所に文様帯をもつ1帯型の中で、文様帯内の隆線の多条化から見て、石小屋洞穴例より新しい様相と解すべきである。図2—3は口唇上に刻みをもち、文様帯には2条の隆線が配される1帯2条型である。図2—4は口縁からやや下った所に文様帯をもつ1帯型であろう。口唇は指の押圧で波状になっている。図2—7~8は貼付された隆線上に刻みを有する。これも1帯型であろう。図2—9は口唇に刻みをもつ無文土器である。橋立岩陰には、はっきり多条型に比定できる例はなさそうである。従って、橋立岩陰には1帯型、多帯型、及びこの時期の無文土器が出土している。さて、図2—6は胴部に斜走する隆線を2本もつ破片である。幾何学的構成を示すものとして重要であろう。全体的な文様構成を知る上では、東京都前原遺跡例(図3)が参考となる<sup>29)</sup>。刻みをもつ隆線を貼付した1帯2条型である。胴部に3本同様の隆線が斜走している。文様帯に配される隆線は、隆線のままのもの、その上に刻み等をもつもののヴァリエティを認めるべきであろう。埼玉県ハケ上遺跡B地点の様相が示唆的である。

埼玉県ハケ上遺跡B地点<sup>30)</sup>にはいくつかの型式の隆起線文土器が見られる。これらはすべて細い粘土紐を貼付し整形した隆線をもつ。図4—1~2, 4は多条型である。直線状隆線で構成される場合と、これに刺突を加える場合とがある。図4—4は口唇に押圧を加え、図4—1は口唇に刻みを加えている。図4—3は上下の関係が正しければ、隆線の間隔から考えて、多帯型の可能性がある。この隆線上には刻みが加えられている。図4—5は1帯2条型ではないかと思っている。これは橋立岩陰(図2—3)に対比されるであろう。

栃木県大谷寺洞穴<sup>31)</sup>にも3つの型式が認められる。隆線の作出については、すべて細い粘土紐を貼付し整形された隆線と報告されている<sup>32)</sup>。図5—10, 図6—3は石小屋洞穴例(図1—2)に対比すべき1帯型の口縁部、あるいは口縁部直下から文様帯の部分の破片かと思われる。図5—6, 9は、恐らく3帯型の胴部片であろう。図5—6に見られる下位の文様帯には、3条ではなく4条の隆線が配されており、波状隆線はない。橋立岩陰例(図2—2)に比して新しい様相であろう。この4条の隆線をもつ文様帯は石小屋洞穴例(図1—2)の文様帯と同じである。図6—1~2も1帯型であるが、2・3条型に分類できるであろう。これらはやや太い波状隆線文を文様帯にもつことで図5—10, 図6—3や石小屋洞穴例とは様相を異にしている。他には多条型がある(図5—1~3, 7~8)。隆線の性状は他と同じである。口縁部片があり、口唇部を波状に作り出している(図5—1)。石小屋洞穴例には斜走する隆線をもつ破片(図8—10~11)があるが、類似した

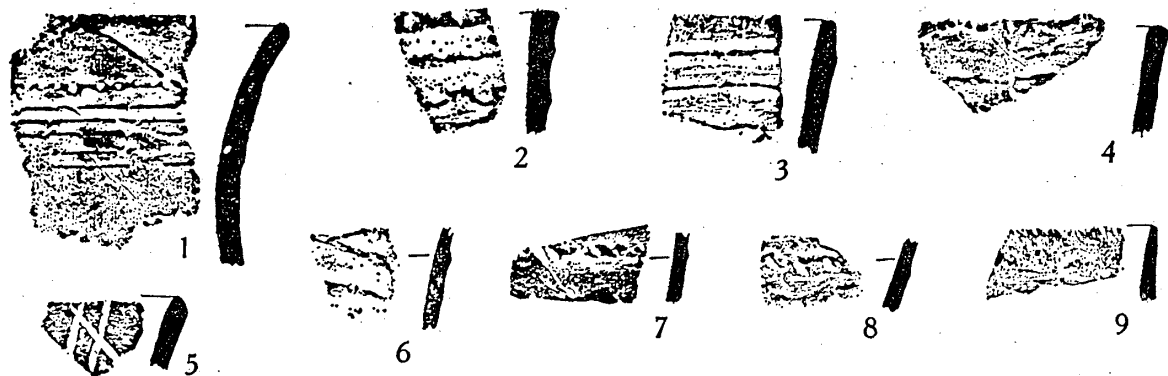


図2 橋立岩陰 S=1/2



図3 前原 S=1/2

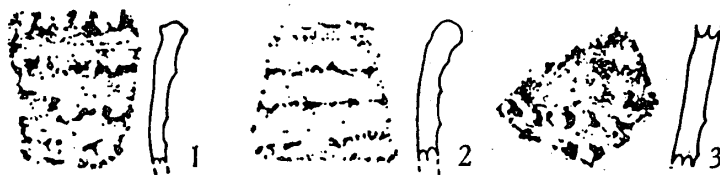


図4 ハケ上B S=1/2

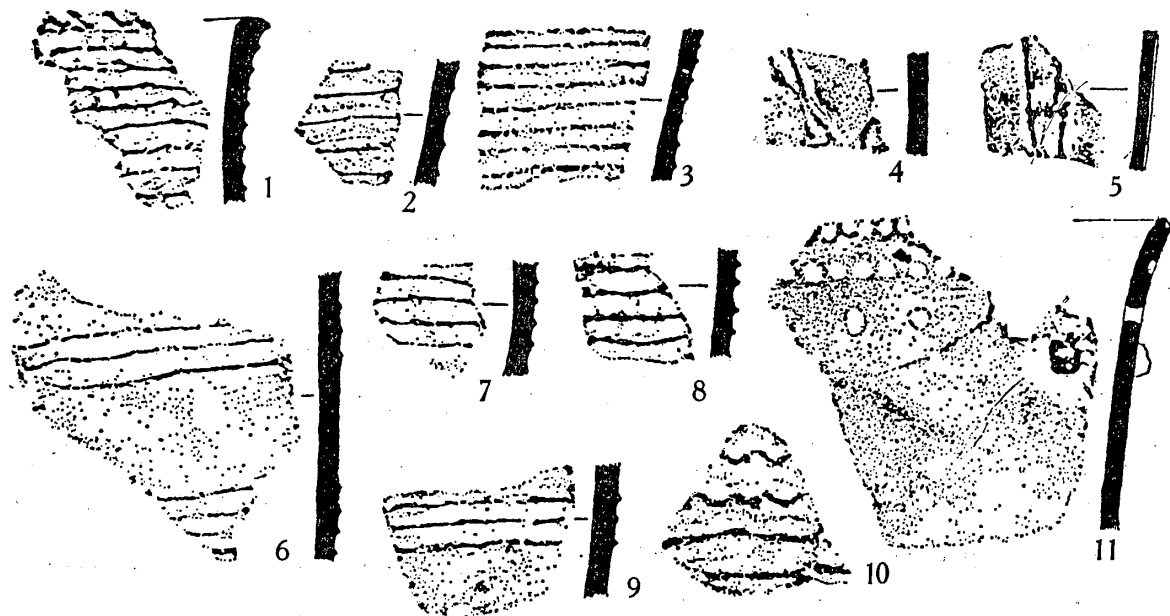


図5 大谷寺洞穴(1) S=1/2



隆起線文土器瞥見



図6 大谷寺洞穴(2) S=約1/1



図7 広福寺境内 S=1/2

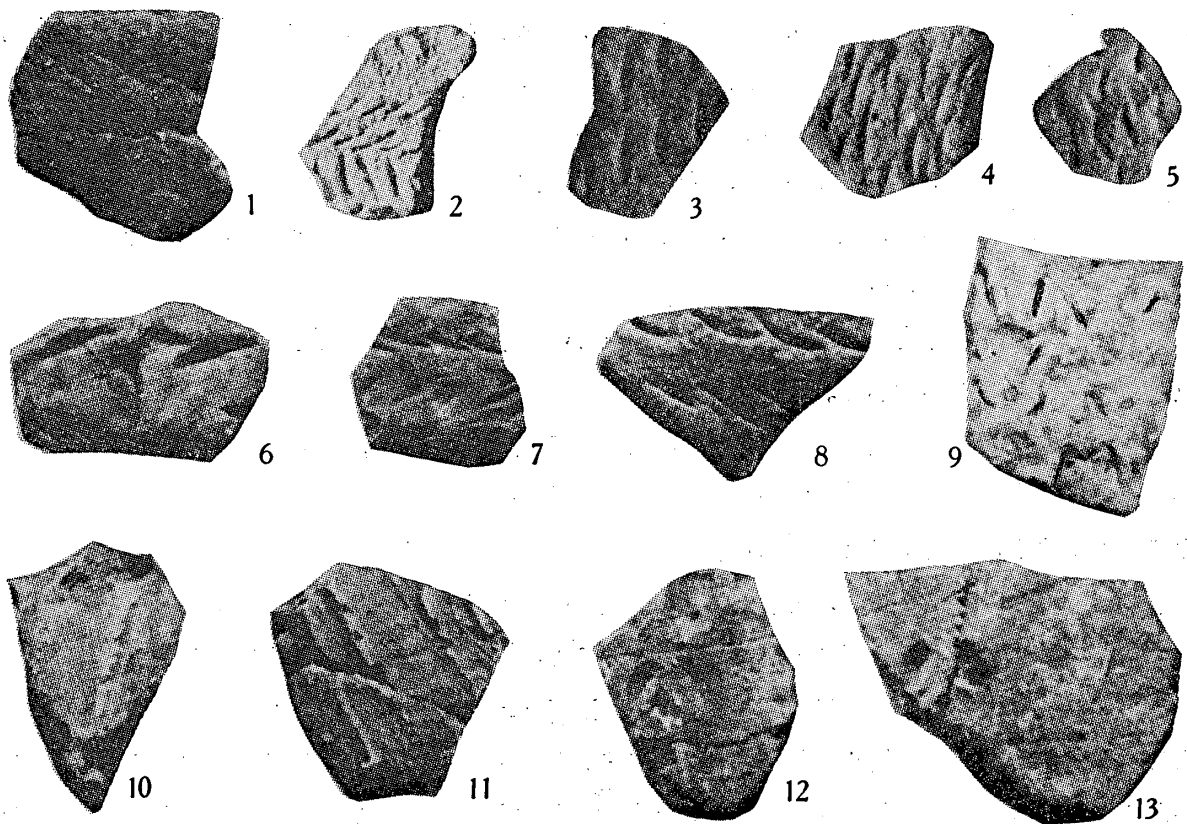


図8 石小屋洞穴

ものが大谷寺洞穴からも出土している(図5—4~5)。幾何学構成の一端をうかがえる。大谷寺洞穴と石小屋洞穴の隆起線文土器群では類似する部分が多い。また、両洞穴の資料に於いて、隆線上に刻みや刺突を持つ例は見られなくなるようである。

このように各遺跡出土の隆起線文土器を見ていくと、1帯型、多帯型、多条型がほぼ安定して存在していることに気がつく。1帯型について考えると、石小屋洞穴例(図1—2)→橋立岩陰例(図2—1)という変化が極めてスムーズなものとして把握できる以上、その連続の中に橋立岩陰や前原やハケ上Bの1帯2条型(図2—3, 図3, 図4—5)を入れて考えられないので、石小屋洞穴例に平行するかあるいはより古く考えなければならない。そのために、ここで多帯型について見ると、橋立岩陰、なすな原例(図2—2, 図1—1)→大谷寺洞穴(図5—6)という変化が読み取れる一方、後者の文様帯の中には1帯型の石小屋洞穴例と共通するところがある。また、この石小屋洞穴の土器のように、下位に文様帯をもつ1帯型に系統上溯行する土器は神奈川県広福寺境内例(図7)である<sup>33)</sup>。拓図では、隆線が2条しか見えないが1本剥落している。この刺突を有する直線的隆線は石小屋洞穴例よりも太く、より古い段階のものと考えなければならない。前原や橋立岩陰やハケ上B地点の刺突や刻みをもつ隆線に通ずると思われるし、口縁部にある2条の波状隆線文は直接器面から作り出されており<sup>34)</sup>、この技法はなすな原例(図1—1)の口縁部文様に共通すると考えられる。この広福寺境内例はなすな原例に時期的に平行すると考えられる。さらに、大谷寺洞穴と石小屋洞穴の隆起線文土器の内容に共通する点が多いことを考え合わせると、前原や橋立岩陰の1帯2条型やなすな原例を典型とする3帯3条型と、石小屋洞穴の1帯4条型と大谷寺の3帯型には古・新の様相を認めなければならないであろう。大谷寺洞穴や石小屋洞穴に前原・橋立岩陰的な1帯2条型が存在しないのは、その傍証となる。多条型については、橋立岩陰に内容が近似するハケ上B遺跡に多条型が存在し、大谷寺洞穴にも多条型が伴うことから、古い方、新しい方の両期に伴うと考えられる。

これらは、細隆起線文土器、微隆起線文土器という従来の分類区分だけでは抽出できない内容を含んでいることは確かである。

関東の「ハ」の字形爪形文をもつ隆起線文土器を新しく考える者は、先に紹介した以外にもいる<sup>35)</sup>。いずれも、隆起線文自体の分析を経てのことではない。関東地方の隆起線文土器の終末は、今のところ次のような一群にまとめられる。

石小屋洞穴例(図1—2)のような1帯型からの変化である橋立岩陰例(図2—1)の口縁部の鋸歯状の隆線は、上述の土器群には見られない新しい文様である。同趣の文様は他所にもある。

長野県荷取洞穴例は小林達雄の報告<sup>36)</sup>によれば、すべて隆線は工具の押し引きによるはみ出しによるもので、一括して取扱うべき土器群であろう。図9—2~3は口縁部付近に斜走する隆線がうかがえるが、今取り上げた橋立岩陰例の口縁部の文様に極似する。この荷取洞穴例も1帯多条型であろう。図9—1, 6は多条型であるが、少し文様構成が特異である。口縁部2条の隆線下に連鎖状の文様が横走しているが、口縁部付近が特別な扱いになっているのであろう。この連鎖状隆線が

隆起線文土器瞥見

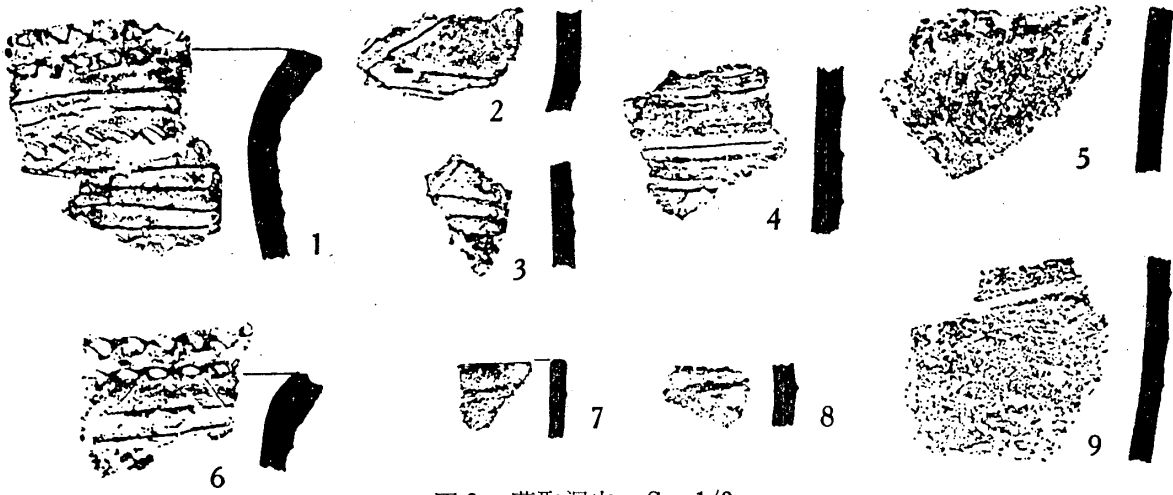


図9 荷取洞穴 S=1/2

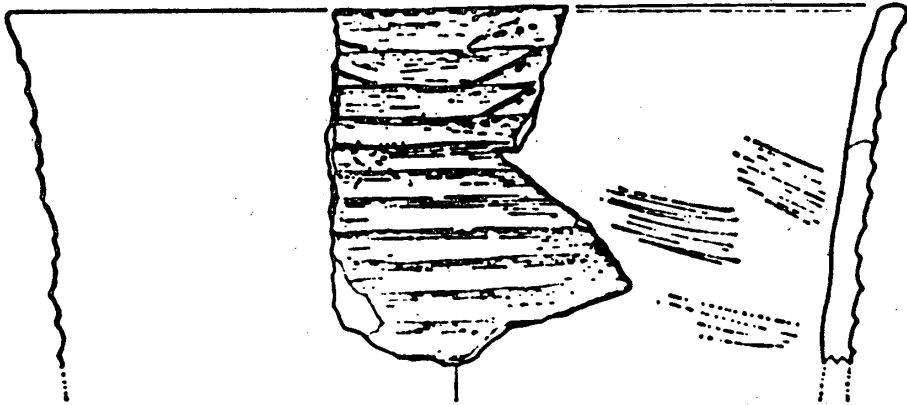


図10 栗木 IV S=1/2

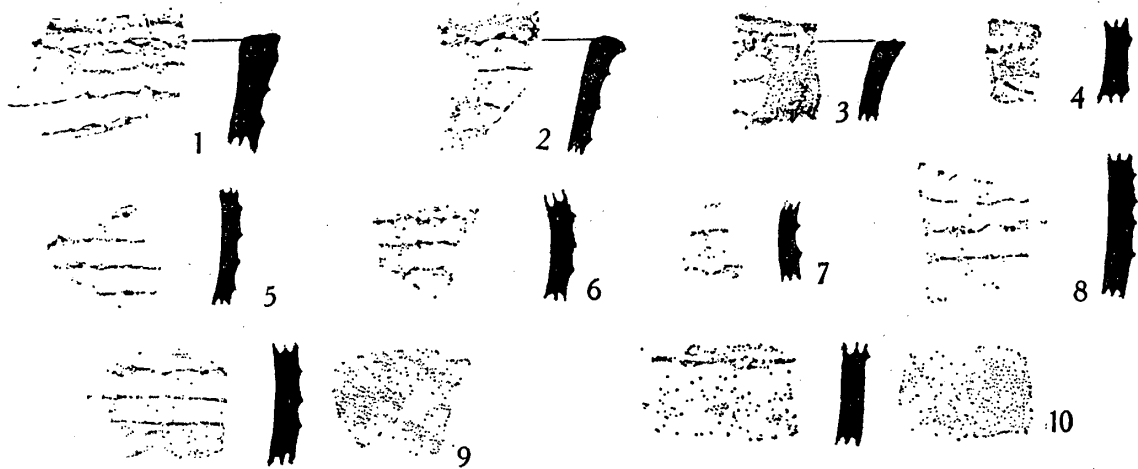


図11 小岩井渡場 S=1/2

区画の役目を果たしているのであろうか。これは橋立岩陰例(図2-1)の連鎖状隆線に対応する。図9-7は1帯型であるが多条型ではないであろう。これら荷取洞穴の資料は、前段階の1帯型・多条型からの変化の様相を示す好資料である。

神奈川県栗木Ⅳ遺跡<sup>37)</sup>の隆起線文土器(図10)はヘラ状工具の押し引きではみ出した隆線で構成されていると報告されている。これは多条型であるが、口縁部付近に3条横走する隆線の間斜走する隆線が配されており、これも口縁部付近に特別な文様を組み合わす例である。斜走する文様構成は橋立岩陰例(図2-1)、荷取洞穴例(図9-2~3)と共通する。

埼玉県小岩井渡場例(図11)は、ごく細い粘土紐を貼付し整形された隆線で文様が構成されると報告されている<sup>38)</sup>。小片ばかりであるが、多条型の隆線文土器と考える。図11-2は口縁部の隆線間に斜走隆線が見える。これも上述の栗木Ⅳ例の文様構成と同じと見なすべきであろう。

神奈川県花見山遺跡には、内容紹介によれば、器面からはみ出した隆線で構成される多条型がまとまって出土する地点がある<sup>39)</sup>。中に口縁下の隆線間に、「半円型を中心としたハの字形爪形文」を連続か、一条おきに施文した例<sup>40)</sup>があるが、栗木Ⅳ・荷取洞穴例などが口縁部に別種の文様を配することと関係があると思われる。さらに、「微隆線を数条と爪形文を1列の組み合わせを繰り返して、胴部まで文様がいたるもの<sup>41)</sup>」もあるが、多帯化した文様帯の間に爪形文が配される土器である。これについては爪形文としか記述がないので、「ハ」の字形爪形文か、否かはわからない。時期的な問題についてはこの多帯型の様相も参考となるであろうが、実物資料の公表がないので、これ以上は論じられない。恐らくこれら花見山遺跡の隆起線文土器は、大谷寺洞穴の隆起線文土器に平行するかあるいは後出する土器であろう。そして、確かに「ハ」の字形爪形文がこれらの段階に関東地方でも存在することを示すのであろう。

資料的に少なく、長野方面と合わせて考えると、このような一群が、暫定的ではあるにせよ、関東地方の隆起線文土器群の終末の様相としてまとめられるであろう。前段階からの飛躍的な変化は見られないが、波状隆線文が激減する点は重要である。隆線の作出については、隆線の貼付と工具の押し引きが認められる。

上述の検討成果を踏えた上で、千葉県瀬戸遠蓮遺跡の隆起線文土器<sup>42)</sup>は次のように分類できる。

図12-4~10, 12は1帯型であろう。1・2条型と思われる。隆線は押し潰されて波状を呈している。図12-1, 3も1帯型であるが、直線的隆線をもっている。図12-11~12, 15には「ハ」の字形爪形文が見られる。図12-12は1帯型の文様帯の下端に沿って配されているのであろう。図12-11, 15は隆線を有する土器の破片かどうかはわからない。図12-14, 16~20は無文土器である。図12-19にみられる口唇部の押圧、図12-17, 20にみられる口唇部の刻みは隆線を有する例に通ずる。図12-2は鈴木道之助の観察では、波状を呈する貼付隆線の下に、工具を横に引いてはみ出した直線的隆線があるということである<sup>43)</sup>。ただし、実見した限り、細い直線的隆線の断面は図にあるような三角形状ではなく、もっと丸みのある断面を呈するようである。この胴部片の文様構成はなすな原例(図1-1)や橋立岩陰例(図2-2)と同じであると思われることから、多帯型の文

隆起線文土器瞥見

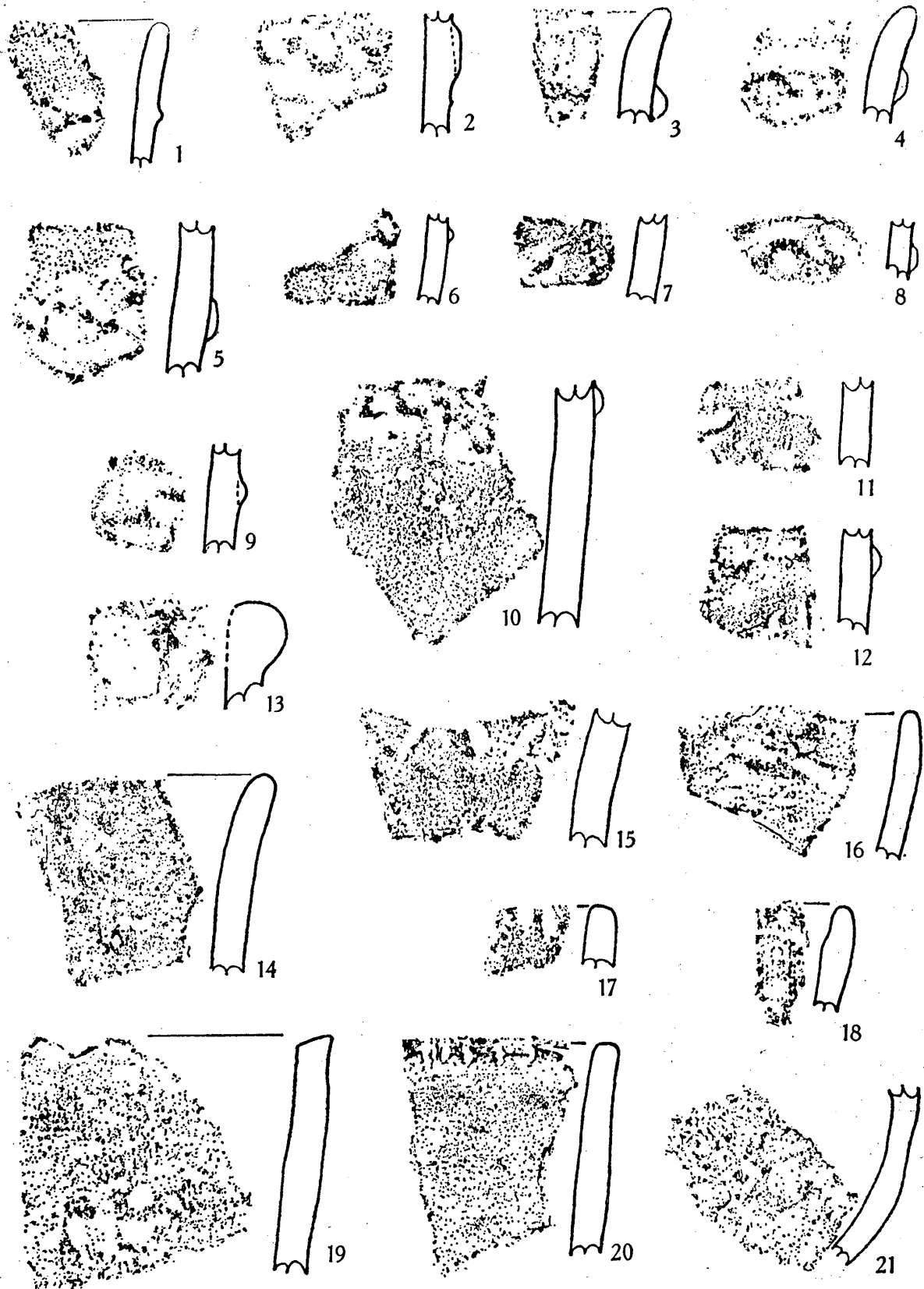


図12 瀬戸遠蓮 S=1/1

様帯部の破片ではないかと考えている。先に1帯型とした図12—1は、細い直線的隆線をもつことから橋立岩陰の1帯型に対比すべきであろう。この1帯型と多帯型との組み合わせは、橋立岩陰のそれと同じである。瀬戸遠蓮からこれらの土器を差し引くと、波状隆線を文様帯にもつ1帯型が残る。橋立岩陰以降の変化には波状隆線文が1帯型の文様帯に登場しなくなるのであろうから、型式学的には文様帯に波状隆線文をもつ1帯型を、時期的に古式として分離すべきである。同様に、大谷寺洞穴例(図6—1~2)も型式学的に古式としなければならない。多帯型については、花見山例(図15—12)が2帯2条型であるが、すべて波状隆線文を有している。この土器はなすな原例(図1—1)に比して太い隆線である。なすな原例よりも型式学的に古相を示している。この土器の各帯に沿って「ハ」の字形爪形文が併用されているのは見逃せない。

これを要するに、文様帯に貼付される隆線がより太く、すべて波状を呈するものをもつ一群がより古式な隆起線文土器である。当然、それらに伴う「ハ」の字形爪形文も古く考えざるを得ない次第である。「ハ」の字単独でも、性状の共通から、隆線併用例と同様に扱うべき例がある。

### 3 関東地方の「ハ」の字形爪形文を伴う隆起線文土器

瀬戸遠蓮遺跡の隆起線文土器は、橋立岩陰の古い部分に相当する一群(図12—1~2)と、より型式学的に古相を示す一群とに分けて考えなければならない。無文土器についてはどちらとも判断しかねる。1帯型に於いて、直線的隆起線文をもつ土器と波状隆起線文をもつ土器を時期的に分離したが、図12—3のようなより太い直線的隆線をもつ土器はどちらに含めるべきであろうか。波状隆起線文をもつ1帯型と直線状隆線文をもつ1帯型を単純に前後関係で理解できる保証はない。千葉県地国穴台遺跡<sup>44)</sup>でも太い直線的隆線をもつ1帯型の土器が数多く検出されている(図13参照)。鈴木道之助<sup>45)</sup>や鈴木保彦<sup>46)</sup>はこれも「微隆起線文土器」としているが、この土器群の位置づけも問題になる。

この問題にはなすな原遺跡内での様相が参考となろう。なすな原遺跡には、先に検討した3帯型とは別の文様帯をもつ隆起線文土器が、全く別地点から出土している<sup>47)</sup>(図14—1~3)。図14—2~3は1帯1条型、図14—1は1帯2条型である。すべて直線的隆線で文様構成されている。これらは地国穴台例(図13参照)と類似している。なすな原遺跡の別の報告では<sup>48)</sup>、これらの土器が出土した近くからも隆起線文土器が出土している。報告や、図録で紹介されているように<sup>49)</sup>、「ハ」の字形爪形文や、波状隆起線文などの土器片が出土している。また、地国穴台遺跡にも波状隆起線文を文様帯にもつ土器がある(図13—9~10)。従って、直線的隆線と波状隆線の同時併存を考えなければならない。

花見山遺跡、千葉県南原遺跡<sup>50)</sup>、同成井遺跡<sup>51)</sup>、東京都多摩ニュータウン No.426遺跡<sup>52)</sup>(以後、No.426と略す)等の各遺跡でも、1帯1条型、1帯2条型に、波状隆線をもつもの、刻みや刺突がある直線的隆線をもつものの両者が常に存在している。例えば、花見山遺跡では、図15—1, 5, 13などは波状隆線をもつ1帯1条型で、図15—2~4は直線的隆線が貼付される1帯1条型である。

隆起線文土器瞥見



図13 地国穴台 S=1/1

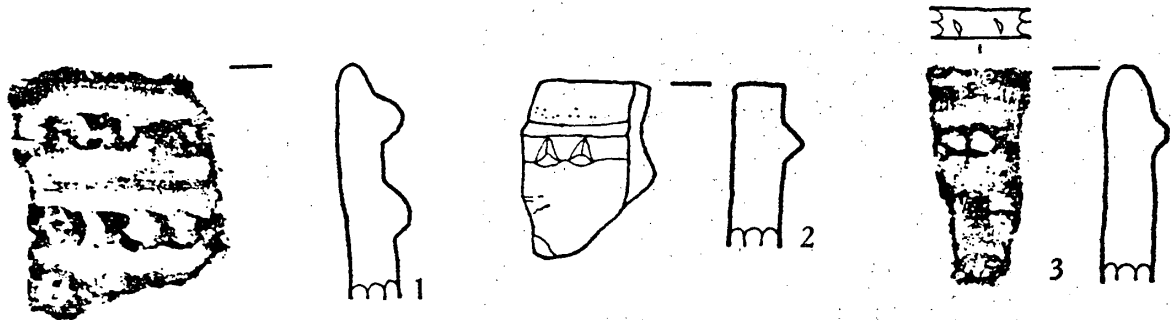


図14 なすな原 S=1/1

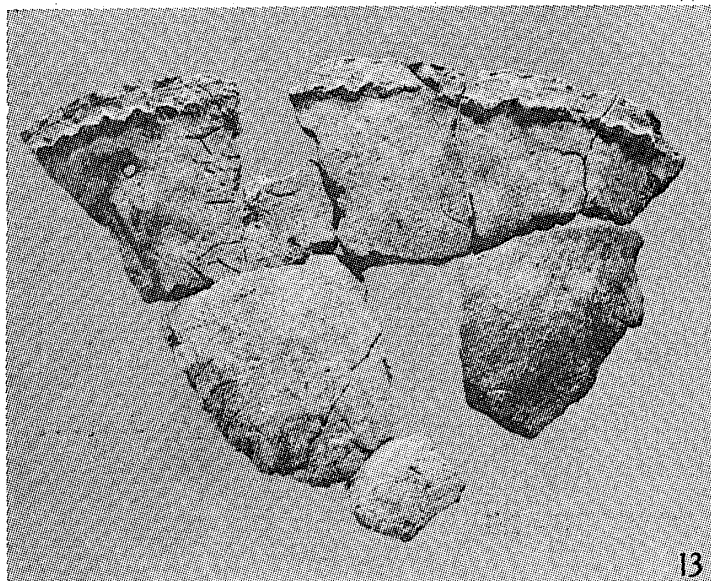
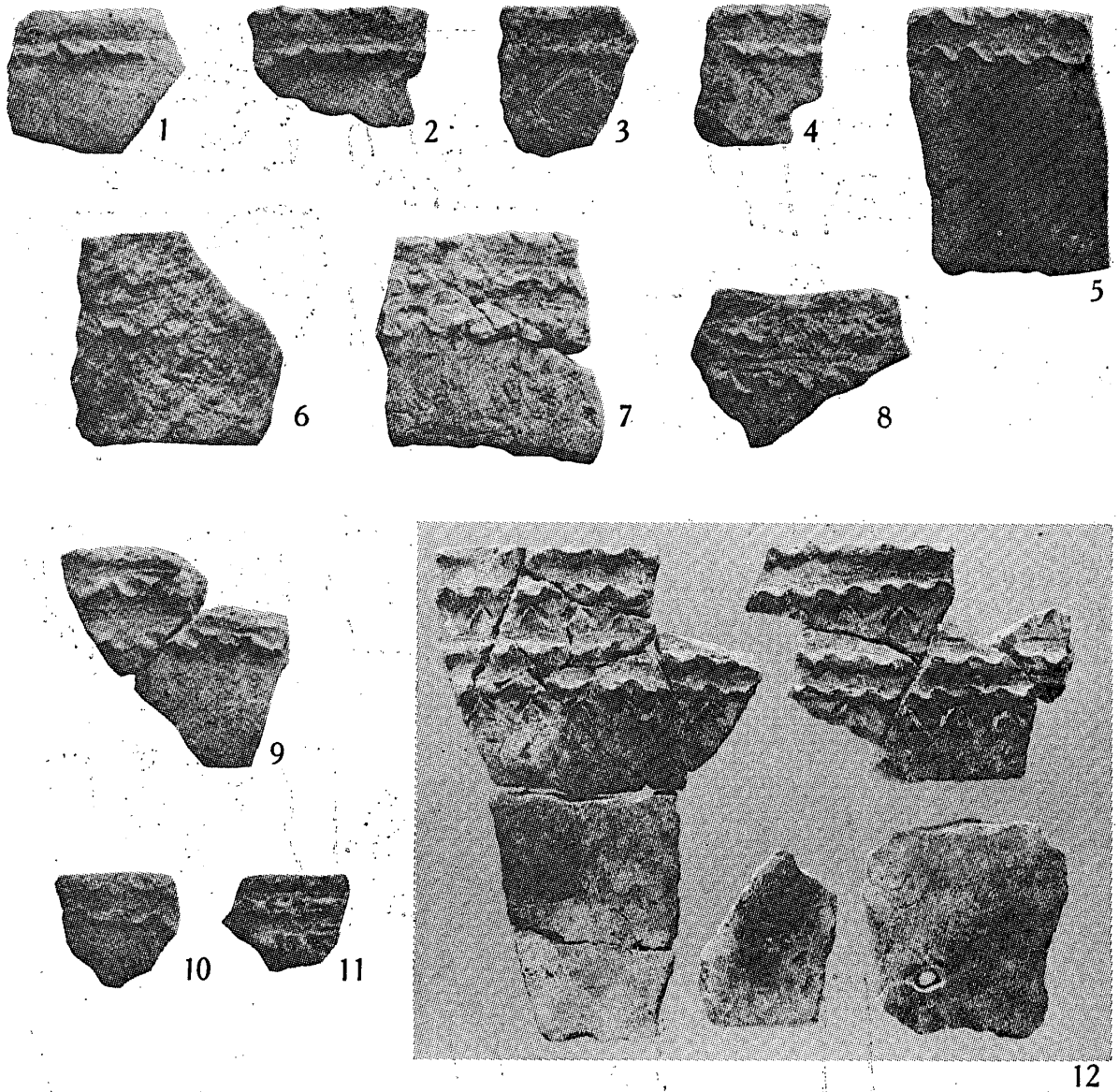


図15 花見山  
1~11 S=約1/2  
12~13 S=約2/5



隆起線文土器瞥見

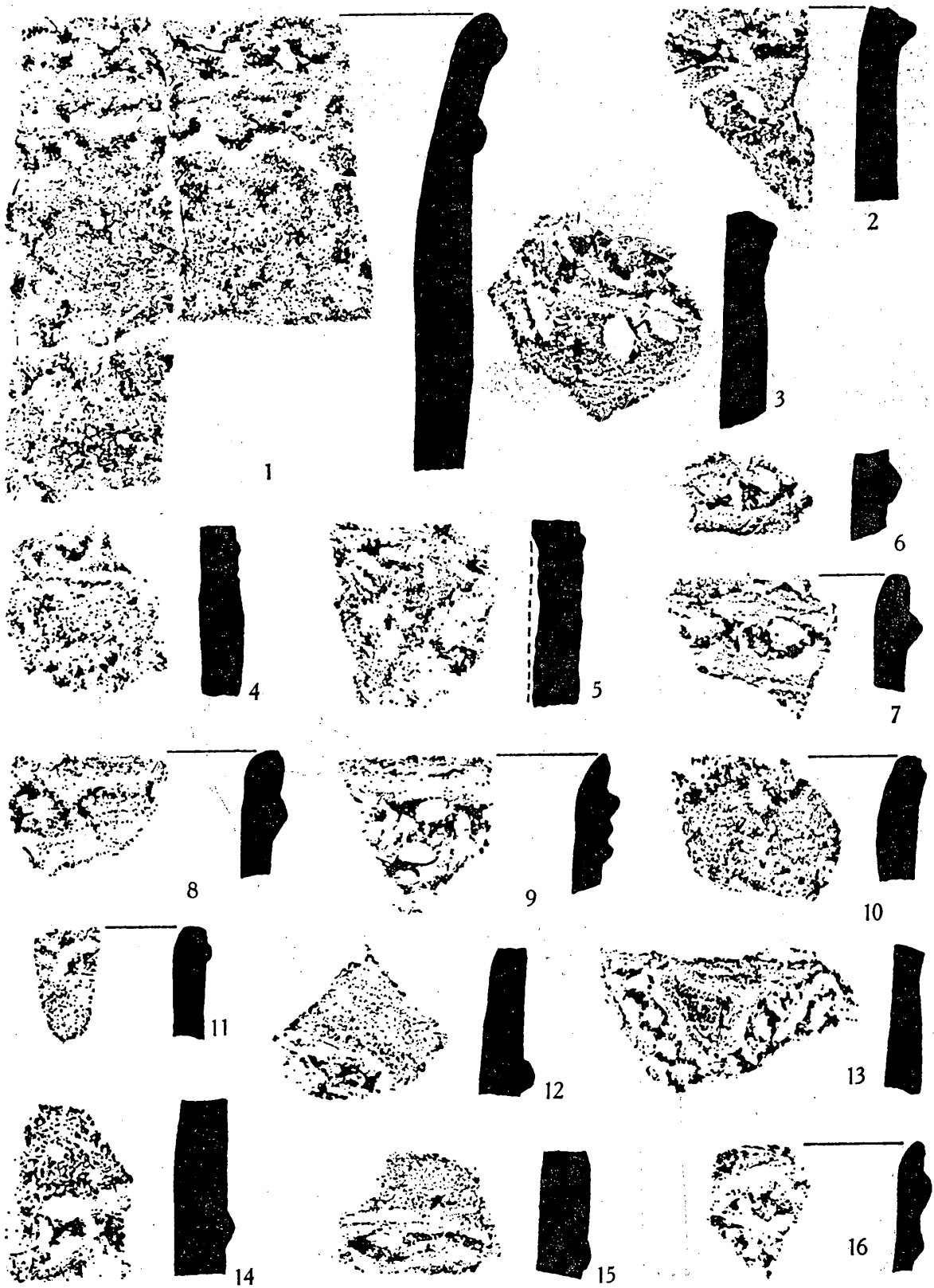


図16 南原 S=1/1

大塚達朗

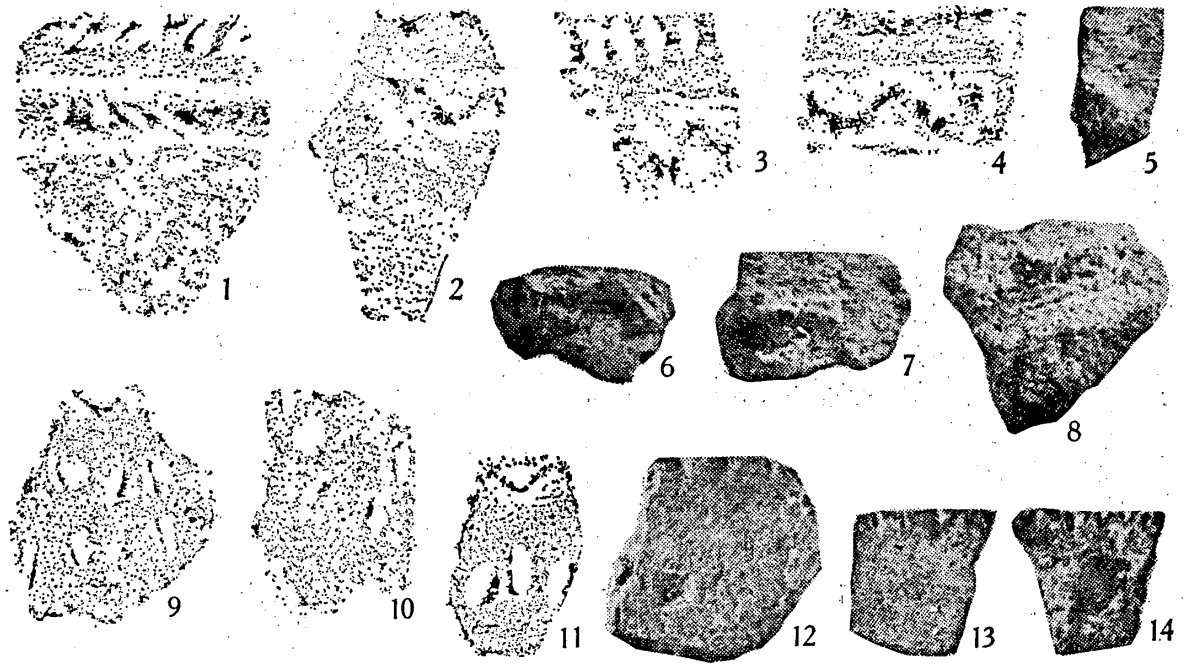


図17 成井 S=1/1

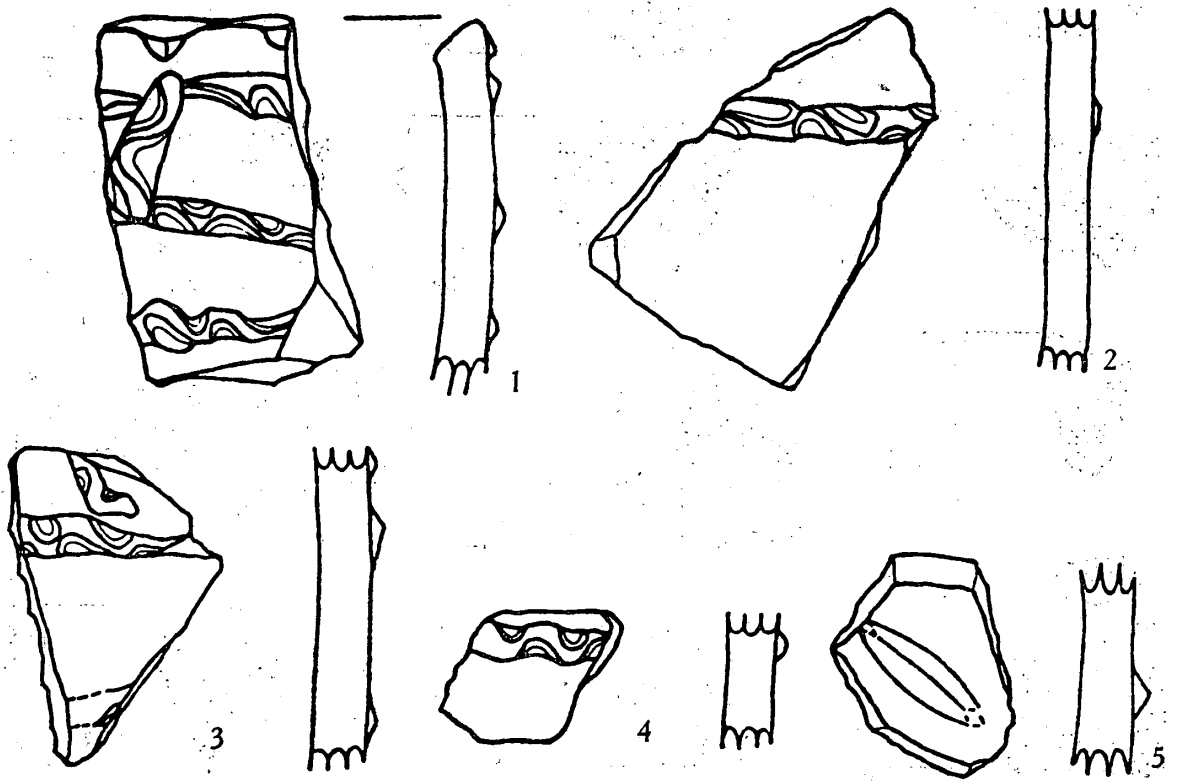


図18 黒川東 S=1/1

隆起線文土器瞥見

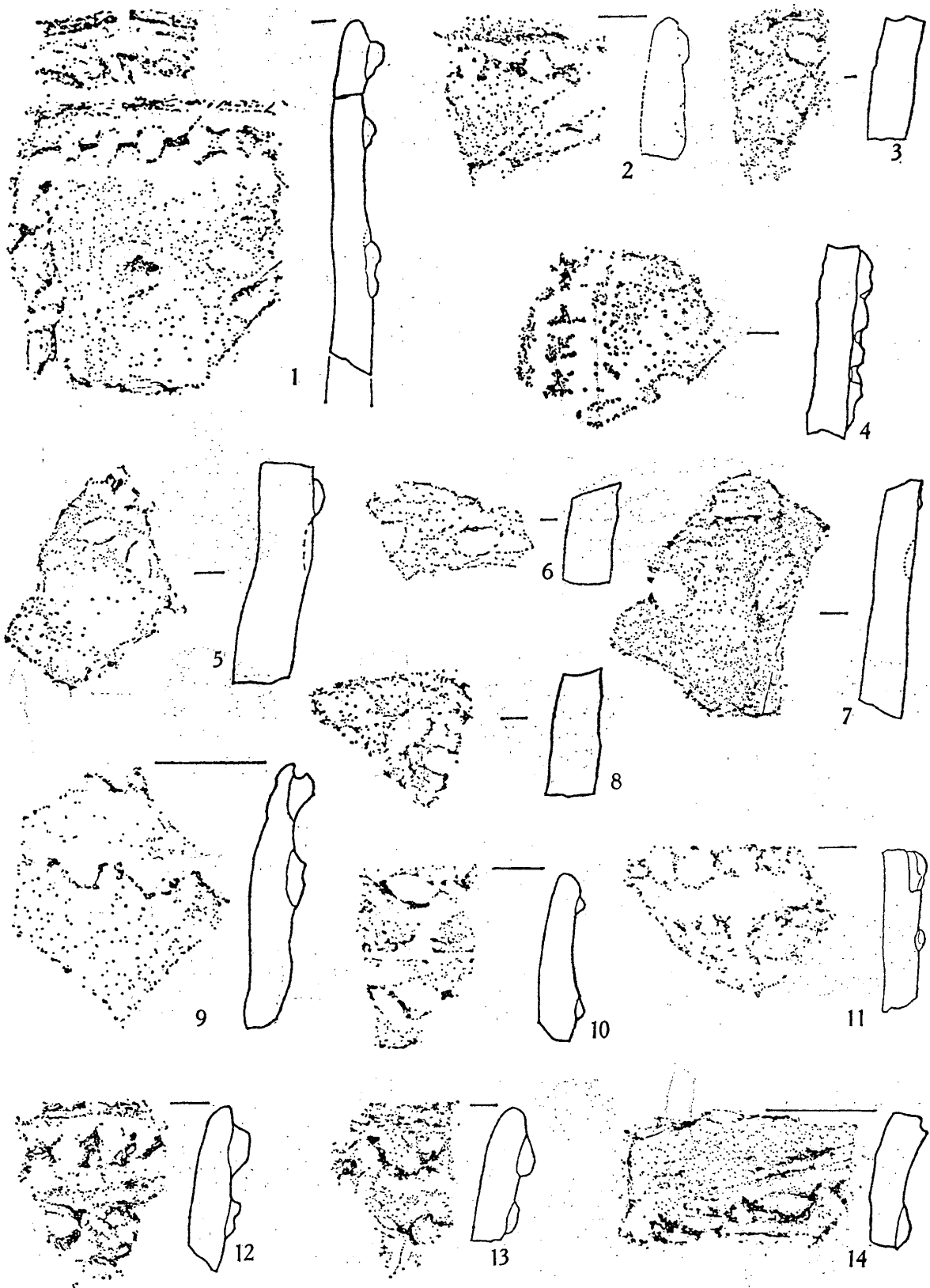


図19 多摩ニュータウン No. 426(1) S=1/1

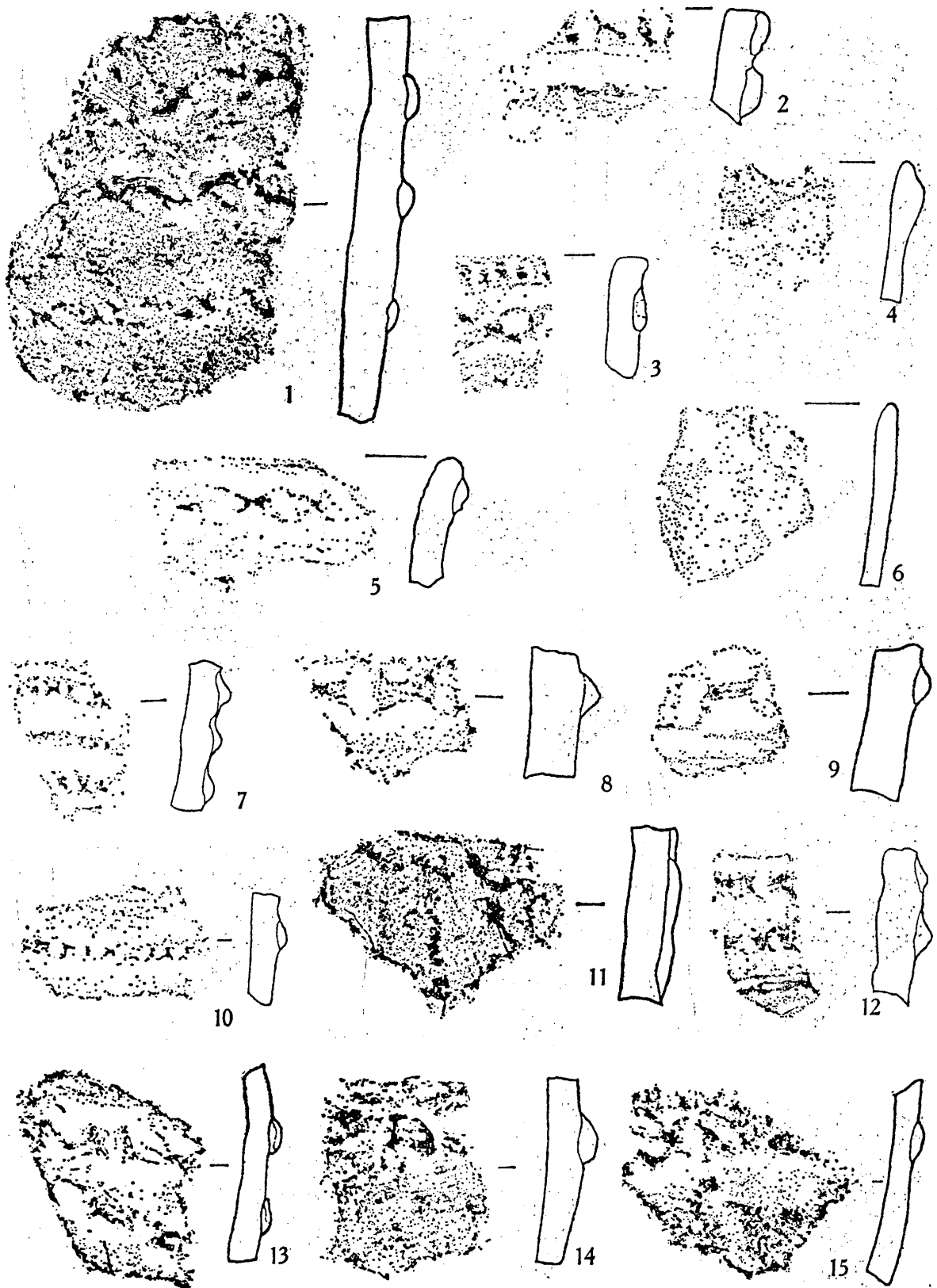


図20 多摩ニュータウン No. 426(2) S=1/1

### 隆起線文土器瞥見

図15—6～9などは、波状隆線が貼付される1帯2条型で、図15—11などは直線的隆線が配される1帯2条型の土器である。南原でも、波状隆線の1帯型（図16—1～7, 9, 15）と、刺突や刻みをもつ直線的隆線の1帯型（図16—8, 14, 16）がある。成井遺跡では、波状隆線を配する1帯1条型（図17—2）と直線的隆線を配する1帯1条型（図17—1）がある。No. 426 遺跡では、図19—9～10は波状隆線をもつ1帯2条型で、図19—11, 図20—2は刻みを伴う直線的隆線をもつ1帯2条型であり、さらに、1帯2条型の図19—1, 12, 13では、1, 13の場合、上が波状隆線、下が刻みをもつ直線的隆線で、12の場合は上が刻みをもつ直線的隆線で、下には波状の隆線が配されている。これらは、波状隆線と直線的隆線の併存関係を如実に示してくれる。図19—1の場合には、「ハ」の字形爪形文も併用されている。

各遺跡の1帯型に於いて、文様帯が口唇直下から始まるもの、やや下って配されるものの違いはある。No. 426 遺跡では胴上半に3条配される1帯3条型（図20—1）もある。神奈川県黒川東遺跡<sup>53)</sup>の隆起線文土器（図18—1）は1帯3条型の可能性が高いが、文様帯が口唇直下にある。多帯型は2帯2条型の花見山例（図15—12）以外に良好な資料は見い出されていない。

これらの土器群が関東では古式と考えるべきものであり、関東第Ⅰ期の土器群と呼ぶことにする。各種特徴について順を追って説明する。

隆線に加えられる施文技法については、花見山遺跡で「ひねり<sup>54)</sup>」、南原遺跡で「つまんでひねる<sup>55)</sup>」といった具合に指先の利用が注意され始めたが、技法全般については、原川雄二、鈴木俊成によって「指、棒状工具、篋状工具等による刻み、刺突、押圧、つまみ<sup>56)</sup>」と簡潔にまとめられるに至った。実際の隆線文はこれらが複雑に組み合わせ、個々の隆線文について技法の識別が困難な場合もある。「つまみ」はもちろん指を利用する場合にだけに限られる。つまむという動作には力を加える中でひねるという動作も含めて考えた方がよい。

このような各種の技法が隆線上だけでなく口唇部にも応用されていて、波状を呈したり、刻みをもったりしている。例えば、花見山遺跡の隆起線文土器（図15—13）では、波状隆起線文は、粘土紐をつまんでひねる行為を連続させているものである。波状隆線の節々に爪の圧痕があることからわかる。口唇部も波状を呈し、その間に爪の圧痕が連続しているのも同一の技法の所産である。花見山遺跡には、この技法によるものが多く見られる。南原遺跡にもある（図16—10）。これなどのように、口唇部をつまむのではなく、土器の器面に対して直接同様な技法を加えれば、正に「ハ」の字形爪形文が出来る。成井遺跡では、篠原 正の観察によれば<sup>57)</sup>、指でひねった波状隆線文をもつ土器の口唇部を爪で刻んだり（図17—3）、直線状の隆線と口唇部を爪で刻んだり（図17—1）、口唇部に爪の刻みのみの土器（図17—12～14）がある。指で口唇を押圧するものもある。No. 426 例（図19—14）では、口唇を指で押して波状にし、隆線は指でつまんでひねっている。口唇の装飾には、存外、工具によるものよりも直接指の先を利用する方が多いのではなかろうか。後述する「ハ」の字形爪形文についても同様のことが考えられる。

関東第Ⅰ期では、横走する隆線での構成の他に、明確な幾何学的構成をとるのを特徴とする。例

例えば、南原遺跡では、1帯2条型の文様帯を区切るようにして押圧された波状の隆線が右端に垂下する例(図16—1)、1帯1条型の文様帯の下に刻みや刺突をもつ隆線が斜走する例(図16—9、16)、刻みをもち、鋸歯状を構成すると思われる隆線をもつもの(図16—13)が見られる。No.426遺跡では、1帯2条型の文様帯下に刻みを有する隆線が垂下する例(図19—1)、やはり文様帯の下に波状隆線が垂下、斜走する例(図20—11)がある。図19—5、8には斜走して刺突をもつ隆線が右上端に見られる。この遺跡で10類とされている隆起線文土器は、縄文原体(絡条体)によって波状にされていると報告されている(図20—13~15)。その中でも文様帯下に斜走隆線をもつ例がある(図20—13)。幾何学的構成の隆線にも波状を呈するもの、直線的で刻みや刺突をもつものの両者がある。

黒川東遺跡出土の隆起線文土器(図18—1、3)を見ると、幾何学的文様構成を示すと思われる隆線が、文様帯の中に入っているようである。

従って幾何学構成は、文様帯の下に垂下するもの、文様帯を区切るように垂下するもの、文様帯下に沿って斜めあるいは鋸歯状になるもの、文様帯の中に斜めになるもの等のヴァリエティがある。橋立岩陰や前原の幾何学的構成(図2—6、図3)は、この第I期の幾何学的構成に系統を求められると考えている。

貼付文も少ないが存在している。実物資料が公表されていないが、花見山遺跡には、押圧の加わった直線的隆線の1帯2条型の胴部に、刺突を有する数センチメートルの短隆線が2本ずつ等間隔に貼付される例がある<sup>59)</sup>。この土器の隆線は、同遺跡の他の例よりも太いと報告されている。より古い隆起線文土器の可能性もあろう。しかし、図15の隆起線文土器など同一地点から出土している。本資料の公表がないので判断は保留しておく。黒川東遺跡には小さな粒状の貼付文を口縁部にもつ例(図18—1)、楕円形の貼付文をもつ例(図18—5)がある。南原遺跡にも小さな粒状の貼付文(図16—11)と楕円形貼付文(図16—12)がある。瀬戸遠蓮例(図12—13)も口縁部に貼付文をもっている。類例の増加を待って、具体的な検討に入っていきたいと考えている。

「ハ」の字形爪形文は黒川東遺跡を除けば、花見山、なすな原、No.426、南原、成井、瀬戸遠蓮、地国穴台等の各遺跡で伴っている。図12—12、図13—6、図15—12、図16—2~5、図19—1~2、4~5、8は隆起線文土器に併用される例、図12—11、15、図13—16~17、図17—9~11、図19—3、6~7は単独で使われるか、隆起線が欠失している例である。文様施文には指を利用する場合と工具を用いる場合があり、遺跡ごとにヴァリエティがありそうである。

花見山遺跡の第I期に比定される土器では、隆線のみ土器と、「ハ」の字形爪形文を併用する土器がほぼ同数存在しているようである<sup>60)</sup>。また、この遺跡では、「ハ」の字形爪形文が隆線に沿って配されるだけでなく、それ自体文様帯下から垂下・斜走するように連続施文されている例がある<sup>60)</sup>。隆線による幾何学構成が、「ハ」の字形爪形文によって置換されていると考えるべきであろう。No.426例(図19—1)も、土器の下端に「ハ」の字の一部が残っているので、「ハ」の字形爪形文があるモチーフを構成するようである。さらに、量的に多い少ないはあるが、ほぼ各遺跡か

### 隆起線文土器瞥見

ら出土することから、「ハ」の字形爪形文は、関東地方第Ⅰ期隆起線文土器の文様体系・施文技法体系の中で理解すべきものと考えている。当然、型式学的研究の対象となる。

南原遺跡での在り方は、「ハ」の字形爪形文の変化を考える時に参考になるかと思われる。図16—2～3は太い波状隆線（恐らく、ひねりによる）を、図16—4～5は細い波状隆線をもつことから時期が異なると思われる。そのことと関係して、「ハ」の字形爪形文の施文技法も異なっている。すなわち、前者は指で器面を深くしっかりとつまんで作られたもので、「ハ」の字形爪形文の内側には器面の盛り上がりが見られ、後者は指でつまむように指先をそろへ、そのまま器面に押しつけた結果と観察される。そのために、図16—2～3が大振りな「ハ」の字形爪形文が出来、図16—4～5が小振りな「ハ」の字形爪形文が出来たのである。両者とも、一つの「ハ」の字が左傾する点では共通していて、相似形を呈する。

成井遺跡では、小振りな「ハ」の字形爪形文をもつ土器ばかりが数点出土している<sup>61)</sup>。図17—9は口縁部片で、器面に指先を指しつけて軽く力を入れてつまんだ結果の「ハ」の字形爪形文であろう。図17—11も口縁部片であるが、口唇部は押圧によって波状を呈する部分が見られる。図17—2の波状隆線をもつ土器の口唇部に見られる波状部分と極似する。この土器では、器面をしっかりとつまんでいて、出来た「ハ」の字形爪形文の内側には図17—9よりもはっきりと器面の盛り上がりが生じている。図17—10では、器面を指先でつまむというよりは押しつけたままといってよいものである。成井遺跡の場合、指先を利用した「ハ」の字形爪形文は個々の土器によって微妙に技法が異なっており、今後類型化を考えねばならないであろう。なすな原遺跡の「ハ」の字形爪形文も、実見してみた限りでは成井の一部のものと同様の技法、形状が同じようであるが、本報告が刊行された上で具体的に触れたい。

No. 426 遺跡ではこの文様が比較的多くある<sup>62)</sup>。図19—2, 5～8は「ハ」の字状を呈する部分が浅い凹みを呈し、工具にしる指の先にしる、そのような先端がくい込んだ跡が明瞭でない点で共通する。図19—1, 3～4は施文具の先端が深く器面にくい込んだ刺突痕をもつが、1では右側の「ハ」の字の上の圧痕は浅い凹みで、4の右端も浅い凹みで、3の「ハ」の字の上の圧痕2つも浅い凹みである。指先を利用したのか、工具を用いたのか判断に苦慮しているが、深いものと浅いものなどが組み合うのが工具によるものとは考えにくいのではなかろうか。さらに、例えば、図19—1, 3, 5, 7などには「ハ」の字の内側に器面の盛り上がりが見られる。

この遺跡の「ハ」の字形爪形文はすべて大振りであるが、例えば小振りな成井例（図17—9～11）に対して多くが相似形を呈するように見える。

瀬戸遠蓮、地国穴台遺跡の「ハ」の字形爪形文も実見したところ、すべて指先の利用によるものと考えている。両遺跡とも大振りなもの（図12—11, 15, 図13—16～17）と小振りなもの（図12—12, 図13—6）とに分けられる。隆線について見ると図12—12はわずかに波状を呈する隆線を持ち、南原例（図16—2～3）の波状隆線とは相違がある。図13—6はへんべいな直線の隆線をもつ。

花見山遺跡例（図15—12）は竹管を利用した刺突かもしれない。これは大振りな「ハ」の字形爪

形文である。また、先に触れた同遺跡の「ハ」の字形爪形文自体が幾何学的構成をなす例は、「ハ」の字が小振りなようである<sup>63)</sup>。

判断に不安定な要素が多いが、遺跡によって大振りなものだけがあったり、小振りなものだけがあったり、両者があったりすることから、「ハ」の字形爪形文の形状によって細分していく必要があるかと思われる。さらに南原遺跡の場合のように、隆線でも区別できるものがあることや、No. 426 遺跡と成井遺跡の「ハ」の字形爪形文の形状の対応関係などから、時期差の存在は疑えないであろう。ただし、正確を期するためには、技法と文様の関係についてより具体的な類型化をしなければならないが、これについては資料の増加を待ちたい。だが、少なくとも、関東第Ⅰ期に伴う「ハ」の字形爪形文は、その様相から、二時期に細分して考えられるであろう。古い方に No. 426 例(図19—1～8)、南原例(図16—2～3)、花見山例(図15—12)、瀬戸遠蓮例(図12—11, 15)、地国穴台例(図13—16)、新しい方に成井例(図17—9～11)、南原例(図16—4～5)、瀬戸遠蓮例(図12—12)、地国穴台例(図13—6)や、花見山の別の一群を考えている。先に記した点から、なすな原遺跡の「ハ」の字形爪形文も新しい方に含めた方がよいであろう。

ところで、南原例(図16—1)は「ハ」の字形爪形文をもたないが、No. 426 例(図19—1)と同種の幾何学構成をもつ土器である。南原例はすべて波状隆線をもつ点で、No. 426 例と異なるが、両者は同一段階の土器と考えられる。南原遺跡の場合、図16—4～5を除いた大部分(Ⅰ～Ⅴ類に分類した)を技法的に一括して扱うべきであるが<sup>64)</sup>、これらは、量的な点を別にすれば、古い段階の様相を示すと考えている No. 426 遺跡の土器群とよく似ている。

そこで引き算してみると、少し様相を異にする注意すべき土器が No. 426 に残る。図20—1, 7, 10～11, がそれである。図20—11は南原例(図16—1)と同じように垂下する隆線が波状を呈するが、この波状隆線は南原例に比して細くなっている。幾何学構成をもつ隆起線文土器の場合の時期差が関係した現象と考えたい。図20—7, 10の細い直線的隆線のその形状や、刻みなどはむしろハケ上B例(図4—1・3)に近い様相をもっている。これはハケ上B段階の多条型かもしれない。図20—1は胴部上半に文様帯が下る1帯3条型の土器と考えているが、隆線が波状ではなく直線に取って代わられると広福寺境内例(図7)のようなやはり文様帯が下った位置にある1帯3条型が形成されると思われることから、この No. 426 例は新しく考えるべきであろう。ところで、黒川東例(図18—1)は文様帯が口縁部上位にある1帯3条型と考えられ、当例を古く置くことで、1帯3条型での変化は、うまく連続的に把握できる。つまり、黒川東例→No. 426 例→広福寺境内例→石小屋洞穴例(図1—2)→橋立岩陰例(図2—1)という系列であり、文様帯の下降、文様帯内の隆線上の施文の変化、文様帯内の隆線の条数の変化といった過程を見い出せる。文様帯の位置が変動する点については、あるいは多帯型との連導という可能性も考えなければならないであろう。その意味で多帯型の生成・展開が今後の研究課題である。

以上、「ハ」の字形爪形文を分析の中心に据えたと見えてくる検討課題に沿って、細分を試みた。関東第Ⅰ期は古段階と新段階に細分しておくべきであろう。古段階の資料がまとまる遺跡としては、



#### 隆起線文土器瞥見

No. 426・南原遺跡などがあげられる。新段階では成井遺跡がまとまった資料を出土している。この遺跡では、「ハ」の字形爪形文をもたない土器でも、施文には指先がよく利用されており、その意味で一括して扱うべき土器資料と考えている。花見山遺跡では第Ⅰ期古新の両段階の土器が抽出できる。黒川東には「ハ」の字形爪形文がないが、1帯3条型の様相から、古段階に相当する。また、出土状態から貼付文をもつ土器も含めて考えている。そこで、黒川東の貼付文と類似する南原の貼付文も古段階に比定すべきであろう。

各遺跡での横走る隆線のみ1帯1条型、1帯2条型については、今のところ明確な細分基準を設定しかねている。やはり文様帯の位置の微妙な違いなども考慮に値いするであろうが、これらに於いて文様帯の配される位置の違いが時間的な変化を敏感に表現するものかどうか納得いかない点があり、再度熟考したい。ただし、施文技法から見た場合、No. 426や南原遺跡の第Ⅰ期古段階での波状隆線と刻みをもつ直線的隆線の比率を見ると、前者の方が多いためである。一方、地国穴台遺跡では、刻みをもつ直線的隆線の方が多いためである。地国穴台遺跡の方が新しいことが予想される。さらに目配りして見ると、地国穴台遺跡にある波状隆線(図13—9～10)は、わずかに波状を呈するもので、これは古段階の波状隆線とはやや異なる。又、この地国穴台例と同様な波状隆線と、小振りな「ハ」の字形爪形文とが組み合う例が瀬戸遠蓮遺跡にある(図12—12)ことを考えると、地国穴台遺跡の隆起線文のみの土器の大部分は第Ⅰ期新段階に相当するであろう。波状隆線が減り、刻みを有する直線的隆線の比率が増えることが、ハケ上B・前原・橋立岩陰段階での隆線の施文に影響するのであると考えている。地国穴台資料との比較から、瀬戸遠蓮遺跡の直線的隆線をもつ例(図12—3)は新段階に、なすな原遺跡の刻みをもつ直線的隆線をもつ一群(図14—1～3)も新段階に対比すべきであろう。これら新段階の1帯1条型、1帯2条型は、次の時期に位置するハケ上B・前原・橋立岩陰などの1帯1条型、1帯2条型に接続的である。一方、ハケ上B遺跡資料などに代表される時期の多帯型を見ると、なすな原や橋立岩陰、あるいは瀬戸遠蓮の多帯型などが文様帯中に波状隆線をもつという点で、1帯型に比して対照的様相が目立つ。このことは、多帯型の評価に関係するので留意すべきであろう。

#### 4 編年と地域性

関東の隆起線文土器は文様帯を基準にしてみた場合、いくつかの型式に分類し得た。さらに各型式の系列の組織化を試みた次第である。要約するならば、関東地方の隆起線文土器群はほぼ4期に大別できるであろう。先に設定した第Ⅰ期は波状隆線や直線的隆線を文様帯に貼付する1帯2条型が主体を占める。他に1帯1条型、1帯3条型がある。多帯型も好例があるが、量的に安定して存在するの否かは不明である。他型式との係わり方に注意しなければならない型式と思われることから、出現・発展していく過程を追求しなければならない。多帯型については明確な例を指摘し得ないでいる。又、1帯型では幾何学的文様構成をもつ土器が存在する。「ハ」の字形爪形文は従来の説とちがって、第Ⅰ期からすでに用いられていることがわかった。「ハ」の字形爪形文は複雑で、

「ハ」の字形爪形文の様相を中心に検討して、古段階と新段階に二分したが、さらに細分できるかもしれない。第Ⅱ期は橋立岩陰やハケ上B地点遺跡の資料を代表とする時期で、各種の1帯型と多帯型、多条型が安定して存在するようである。細めの直線的隆線が1帯型・多条型に多用される。1帯型、多帯型の型式学的検討から、新しい一群の土器として大谷寺洞穴の資料を分離したが、これを第Ⅲ期とする。1帯型の中で、1帯2条型はなくなるようである。隆線上の刻みも認められなくなる。第Ⅱ・Ⅲ期の幾何学的構成は第Ⅰ期から系統を引くものであろう。先に終末とした一群を第Ⅳ期に比定する。小岩井渡場遺跡や栗木Ⅳ遺跡や橋立岩陰に好例がある。当時期は、多条型が量的に主体を占めるようであるが、1帯型も存続している。多帯型の命運については少ない公表資料からは何とも言えないが、花見山遺跡の関連資料が重要であろう。口縁部付近に別に文様を配する場合が、1帯型・多条型の両型式に見られるのがこの時期の一つの特色となっている。

表1 関東地方出土隆起線文土器編年試案(1982年1月10日作製)

Ⅳ		花見山(?)	栗木Ⅳ		橋立	小岩井渡場	
Ⅲ		花見山(?)				大谷寺	
Ⅱ		広福寺境内	なすな原	前原	橋立	瀬戸遠蓮	ハケ上B
Ⅰ	新	花見山	なすな原	No.426	成井	瀬戸遠蓮	地国穴台
	古	花見山	黒川東	No.426	南原	(瀬戸遠蓮)	(地国穴台)

表1はこれまでの分析結果を編年表にしたものである。準備不足から既存資料で漏らしたのものもあるであろうし、今後は小片ではない資料が増加するであろう。あくまでも試案であり、後日補正される部分がある。瞥見たる所以である。

次に問題となるのは、関東第Ⅰ～Ⅳ期と他地方各地とどのような対比が可能なのかである。紙数の都合上、要点にのみ触れておく。

関東第Ⅰ期古段階に最も近い内容をもっているのは、長崎県泉福寺洞穴の隆起線文土器であろう<sup>65)</sup>。この洞穴には著名な豆粒文土器以外にも、隆起線文土器の良好な資料がある。文様帯を見ていくと、1帯1条型、1帯2条型が大半のようである(図21, 図22参照)。図21—5, 12, 図22—3は文様帯下に隆線が垂下するもので、図21—11は文様帯下に隆線が斜走するもの、図21—13~14, 図22—5, 9には蛇行しながら垂下する隆線が見られる。1帯2条型の土器資料は関東の第Ⅰ期古段階の土器、例えば、No.426例(図19—1)、南原例(図16—1)と比較すれば、よく類似していると指摘できる。しかしながら、泉福寺洞穴の隆起線文土器の隆線に加えられる施文技法を見ると、刻みと押し潰しだけで<sup>66)</sup>、指でつまんでひねるといった技法は用いられていないようである。口唇部の装飾についても、同様な指先による施文は見られないようである。施文技法上の相違は地域差と考えるべきであろう。そのように考えるならば、刻みをもつ隆線で構成される1帯3条型の土器(図22—10)が文様帯を口唇直下に配する土器であることは、その様相からも関東第Ⅰ期古段階に対比することを支持してくれるであろう。

隆起線文土器瞥見

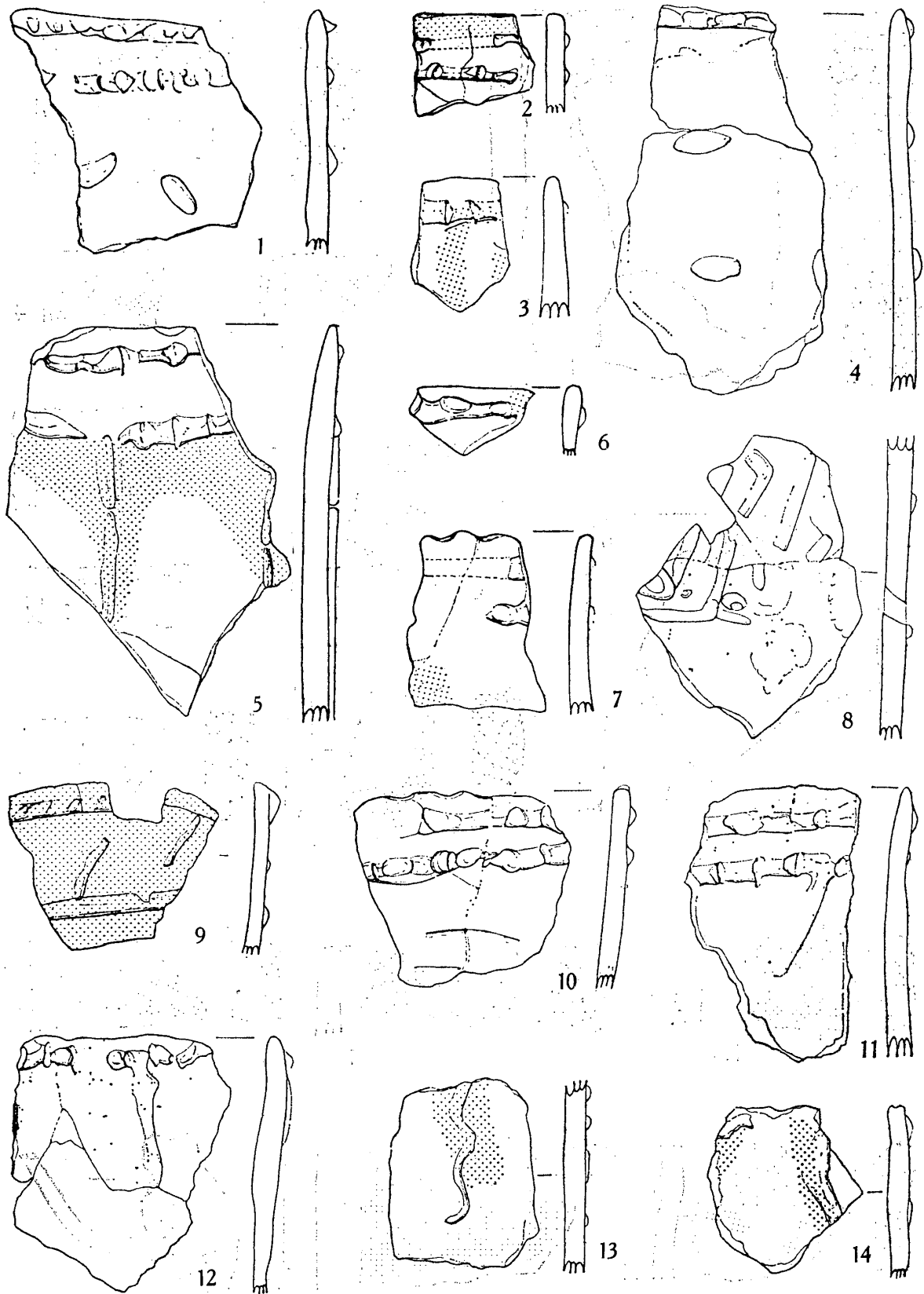


图21 泉福寺洞穴(1) S=1/2

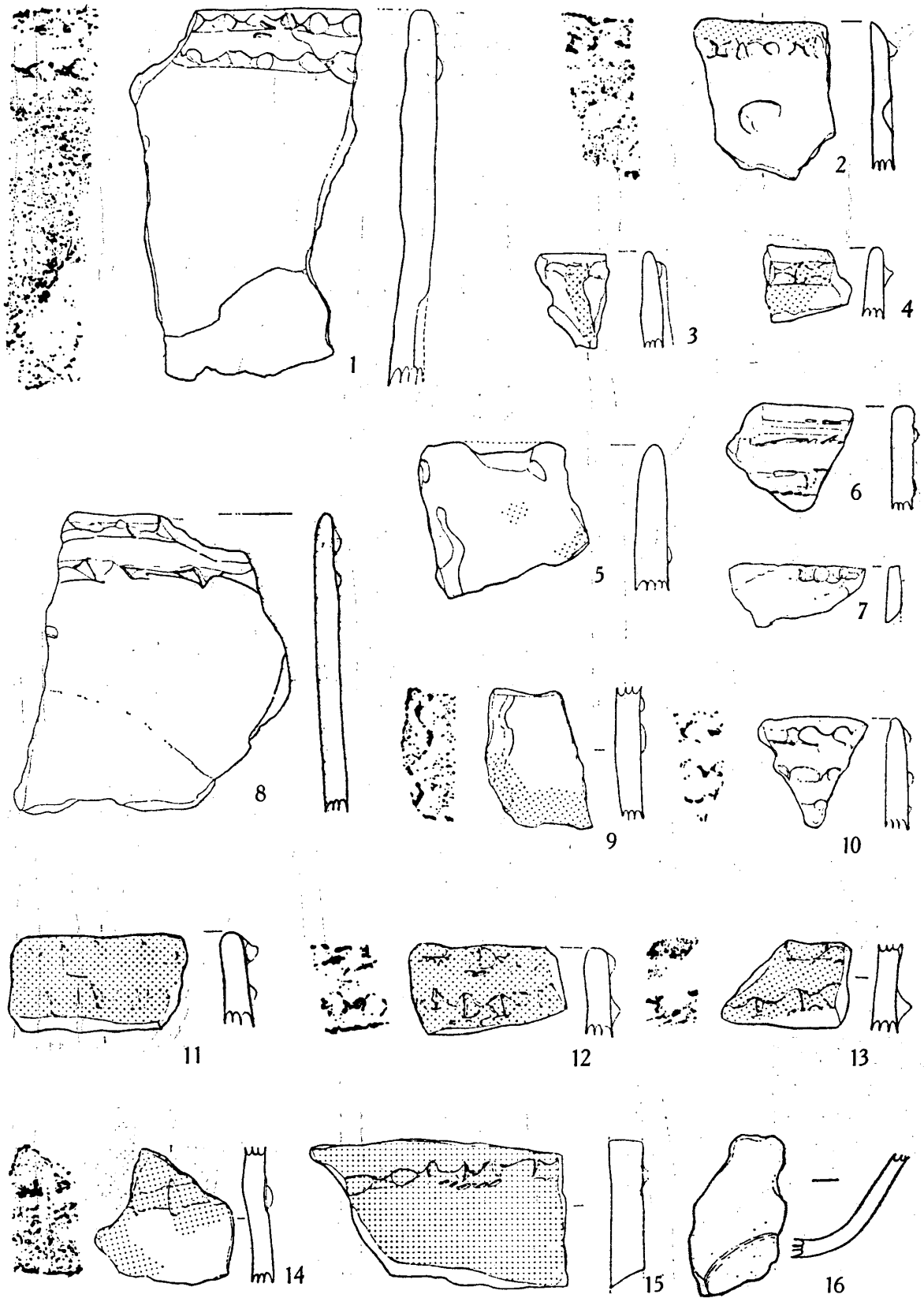


図22 泉福寺洞穴(2) S=1/2

隆起線文土器管見



図23 福井洞穴  
S = 約7/9

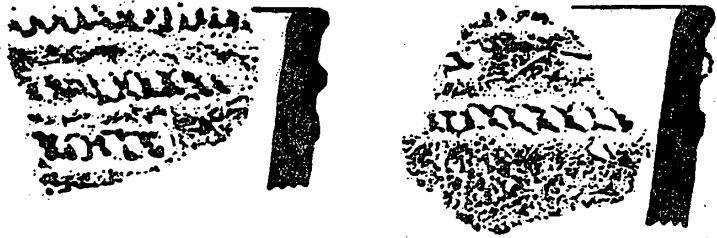


図24 九合洞穴 S = 1/2

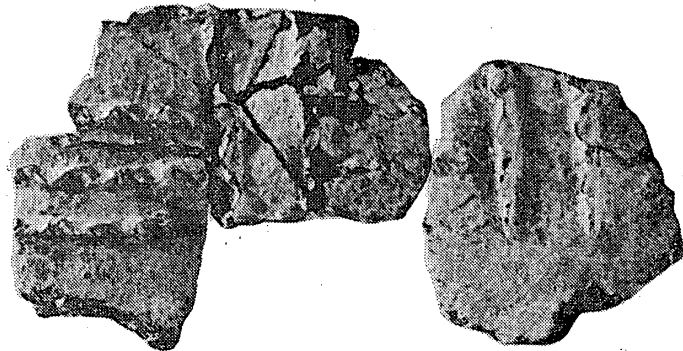


図25 上黒岩岩陰 S = 約1/2

泉福寺洞穴の別の土器（図21—8～9）は泉福寺洞穴の1帯型の土器とは少し様相を異にするが、むしろ同県福井洞穴<sup>67)</sup>第3層出土の「隆帯文土器」の仲間と考えるべきであろう。福井洞穴の「隆帯文土器」は幅広の隆線を胴部の上半に貼付し、口縁部との間に、曲線、あるいは直線の隆線を貼付する土器である。泉福寺洞穴で主体的に存在する1帯型とは別種であるが、この仲間が泉福寺洞穴の1帯型に伴い、一方、福井洞穴第3層には、泉福寺洞穴の1帯型の隆起線文土器と類似する1帯2条型に、幾何学的文様構成や、縦走る短隆線が加わった（あるいは「隆帯文土器」の影響かもしれない）土器片（「細隆起線文土器」と呼ばれる）を利用した有孔円盤（図23）が伴うことから、交差対比が可能であろう。両洞穴の土器群に平行する時期のものがあることが推察される。ただし、福井洞穴第3層には他にも「細隆起線文土器」（必ずしも内容は明らかにされていない）が出土しているが、それらに対比できる土器が泉福寺洞穴にどのくらいあるかはよくわからない。それはともかく、福井洞穴第3層の土器群には当然関東第I期に対比すべきものがある筈である。福井洞穴の隆起線文土器も、隆線には刻みや刺突が加わっているものが大半のようである<sup>68)</sup>。やはり、この地域での地域的特色をよく表現しているのであろう。

ところで、九州では豆粒文土器と隆起線文土器との関係が一つの問題である。泉福寺洞穴には豆粒文そのもののような貼付文を胴部にもつと言われる1帯型の土器（図21—1, 4）がある。図21—4は1帯1条型、同図1は1帯2条型である。図21—4の胴部の横位貼付文について白石浩之は、縦位や斜位の貼付文（豆粒文）からの変化を考えている<sup>69)</sup>が、図21—1の胴部の貼付文は斜位構成となっており、豆粒文それ自体の文様構成と見なければならぬであろう。こういうキメラ（chi-

mera)的な土器が存在することは、豆粒文土器と隆起線文土器とが層位的にほぼ分離できる現象(第10次調査では豆粒文土器の単純な層で良好な資料が検出された<sup>70)</sup>)に別の解釈を要求するのではなからうか。両者が平行関係をもつ可能性も考えたい<sup>71)</sup>。

四国では、古い隆起線文土器として愛媛県上黒岩岩陰第9層出土の土器が知られている。ここには波状隆線を胴部上半に貼付する1帯3条型の土器(図25)がある<sup>72)</sup>。これは文様帯を区切るように隆線が垂下しており、幾何学的構成をもっている。横走する隆線は指でひねっているように見える。この土器は隆線の性状、文様帯及び幾何学的構成から、関東第I期新段階に平行すると考えられる。特に、No. 426 遺跡の1帯3条型(図20—1)に対比できるであろうが、No. 426 例のようにこの上黒岩岩陰例も、広福寺境内例(図7)のような口唇直下ではなくやや下った胴部上半に文様帯が位置する1帯3条型に系統的に連なる好例であろう。この上黒岩岩陰例の口唇部に見られる波状の装飾は広福寺境内例の口唇部及び直下の波状装飾と関連をもつものであろう。本資料は、先に示した関東・中部地方に展開する系列に連導するものとして、分布上の意義を有する。

本州にもどると、岐阜県九合洞穴<sup>73)</sup>には肥厚した口唇に刻みをもち、直下に2条、同様の刻みをもった隆線を貼付する1帯2条型の土器(図24)が知られている。口唇部を含めて刻み施文が卓越する在り方は、関東の成井遺跡や地国穴台遺跡に近いと思われる。従って、関東第I期新段階に対比して考えている。

長野方面では狐久保遺跡の資料が狙上に上る。中に波状隆線を三条胴部にもつ破片<sup>74)</sup>があるが、これなどは1帯3条型に分類できるであろう。上黒岩岩陰・No. 426 例(図25・図20—1)を典型とする1帯3条型の類例と考えている。

東北地方では山形県方面で設定されている日向I a 式(図27—1~3)が関東第I期に平行するであろう<sup>75)</sup>。指頭の押圧を加えて波状にした隆線をもつ1帯型を基本としていることが共通する要素と考える。又、口唇部を指先による押圧(あるいはひねり)によって波状装飾を施す点でも共通している。むしろ日向I b・I c 式<sup>76)</sup>を含めて、口唇部の波状装飾は卓越している。今まで見てきた九州・四国・中部地方の資料と同様に日向I a 式にも「ハ」の字形爪形文がないので、関東第I期の細分に対応させて行く上でむずかしいところがある。しかし、図27—1のように口唇直下に文様帯をもつ1帯3条型があることから、関東第I期古段階に比定すべき部分があると思われる。この土器は黒川東例(図18—1)に近く、泉福寺洞穴例(図22—10)と比較してみると様相を異にする点がある。地域差と考えたい。

著名な新潟県田沢遺跡<sup>77)</sup>の「隆帯文土器」(図26)は多条型の土器であろう。この田沢の土器の隆帯に加えられている「押圧」は、工具の先端によるものではないであろう。凸部の彎曲状態、凹部の窪み工合から、私かに指の利用の可能性を思案している。とまれ、この土器の隆線の幅広なのは施文具に関係している。この土器も口唇部に波状装飾をもっている。これとは別に、太平洋側の宮城県鹿原D遺跡からは、「つまみ出し」という指先の利用で隆線が作出される例が報告されている<sup>78)</sup>。これらは関東に類例がないので直接対比して考えることはむずかしい。しかしながら、田沢

隆起線文土器瞥見



図26 田沢 S=約3/5



図27 日向Ia式  
S=約1/1

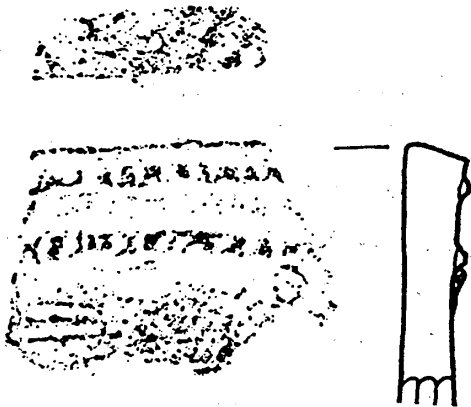


図28 大原B S=1/1

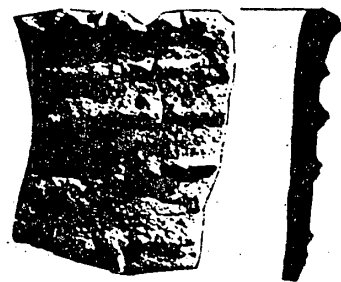


図29 小瀬ヶ沢洞穴  
S=1/2

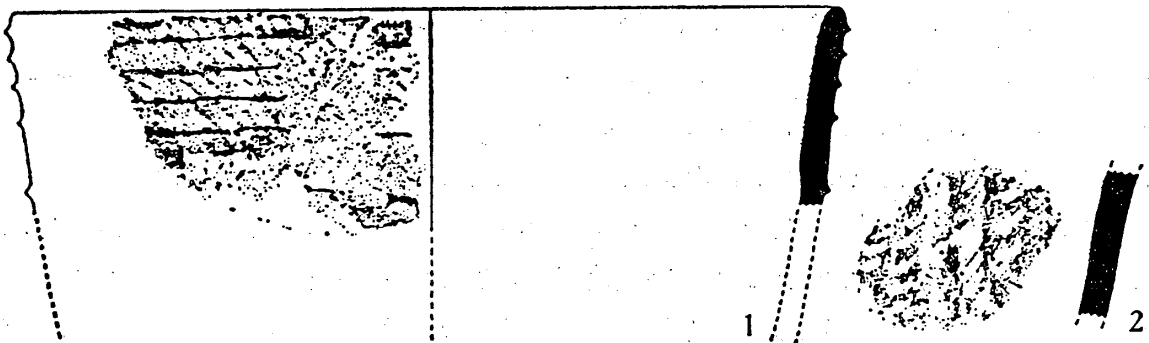


図30 酒呑ジュリナ S=1/2

遺跡ではこの「隆帯文土器」に細い波状隆線をもつ土器が伴うと報告されている<sup>79)</sup>。関東地方との時期的な関係を見る上で、この波状隆線文土器が重要と思われるが、詳細は公表されていないのでよくわからない。ところで、田沢遺跡のすぐ隣りの壬遺跡<sup>80)</sup>（別の名前で呼ばれるが、意外なほど田沢とは近接しているので、内容の違いは時期差と考えられる）出土の隆起線文土器の内容を検討すると、ほぼ日向Ⅰb式、日向Ⅰc式に対比される土器のように思える。壬遺跡には、日向Ⅰa式あるいは関東第Ⅰ期に平行しそうな隆起線文土器はないようである。田沢遺跡は日向Ⅰb式期よりも古く考えねばならない。恐らく、日向Ⅰa式期に対比できるであろう。そうすると、田沢遺跡で伴出したと言う波状隆線文土器は、関東第Ⅰ期に近い時期の所産と考えられる。田沢の「隆帯文土器」もこれに従う。

一方、宮城県方面では他に、大原B遺跡で1帯2条型の土器（図28）が報告されている。口唇部には絡条体圧痕文をもつと言うことである<sup>81)</sup>。刻みをもつ隆線に注目するならば、これは関東第Ⅰ期新段階か、あるいは第Ⅱ期に対比できると考えている。今後、この地域での文様のヴァリエティが出そろうのを見守る必要があるだろう。縄文原体の利用についても類例の増加が待たれる。東北地方内部での地域差を探らねばならないであろう。

次に、関東第Ⅱ期以降の他地方との対比、及び問題となる遺跡と資料について簡単にまとめておく。

問題となる多帯型について検索してみる。石小屋洞穴や荷取洞穴の資料の位置付けについては、すでに記した通りである。これらの遺跡からは多帯型と思われる例は検出されていないようである。愛知県酒呑ジュリナ遺跡<sup>82)</sup>の隆起線文土器（図30—1）は口縁に細い4条の隆線をもつ文様帯があるが、やや間を置いて1本同様の隆線がわずかに残っている。これは多帯型の文様帯の2番目の文様帯の最上部に横走する隆線の一部と見るべきであろう。この土器は文様帯の様相から関東第Ⅲ期の大谷寺洞穴の多帯型（図5—6）に対比できるであろうが、やや後出的な感じもする。後で検討する。新潟県小瀬ヶ沢洞穴<sup>83)</sup>にも多帯型（図29）がある。口唇部直下に3条の直線的隆線をもち、やや間隔を取ってもう1条横走している。これも2番目の文様帯の最上部と見なすべきである。ただし、この文様帯の文様構成は横走する隆線だけでなされるものではないように見える。あるいは、縦走か斜走する隆線があるかもしれない。この土器も指先ぎのひねりによる口唇部装飾をもっている。この点は日向洞穴の隆起線文土器と類似する。しかし、日向洞穴にはこの多帯型に比定できるものはなく、小瀬ヶ沢例の位置付けは別の比較を考えねばなるまい。

酒呑ジュリナ例と比較した場合、両者とも口唇部装飾をもつことでは共通するが、小瀬ヶ沢例は指先でひねった大きな波状装飾である。一方、酒呑ジュリナ例は浅く押圧した小さな凹みを連続させる装飾である。口唇部装飾は異なるのである。両者とも装飾をもつ口唇直下に第1文様帯をもつが、そこに小瀬ヶ沢例がより太い隆線を3条貼付するのに対し、酒呑ジュリナ例は細い隆線を4条貼付している。口唇部装飾の形状の違い、配される隆線の本数、太さの違いは時期差と考えるべきである。大谷寺洞穴例は両者の中間的様相ではなかろうか。多帯型の大谷寺洞穴例は口縁部を



### 隆起線文土器瞥見

欠落しているので口唇部について知ることはできないが、他の土器で見た場合、波状装飾を口唇部にもつ例が多いことから、多帯型の場合も波状装飾をもっていた可能性があるであろう。又、大谷寺洞穴の多帯型例では3条の隆線を貼付する文様帯と4条の隆線を貼付する文様帯があり、太さをみると酒呑ジュリナ例に近い。このように判断してくると、大谷寺洞穴例を両者の間に入れることによって変化はスムーズにたどれ、小瀬ヶ沢例は関東第Ⅱ期に、酒呑ジュリナ例は関東第Ⅳ期にと振り分けることもできるが、しかし、酒呑ジュリナ例に伴う別の隆起線文土器を見た場合、同例は第Ⅳ期まで下げることはむずかしいかもしれない。酒呑ジュリナ例は、第Ⅲ期平行としておく。

小瀬ヶ沢例を関東第Ⅱ期に比定した場合、なすな原・橋立岩陰・瀬戸遠蓮例(図1—1, 図2—2, 図12—2)との文様構成上の相違が目につく。小瀬ヶ沢例の場合、各文様帯の文様構成が異なる可能性がある。あるいは、多帯型内での系統的分離を示唆する資料かもしれない。多帯型の種別、分布、各地での上限・下限などは重要な問題である。

ところで、日向Ⅰb式は多条型が主体を占める一方、1帯型も多条化したものが多い。多条型の影響ではなかろうか。これらの土器の中には配された隆線帯の下端に垂下、あるいは斜走する隆線があり、又、隆線帯を区切るようにして垂下する隆線をもつ例がある。類似した幾何学構成は、関東では第Ⅲ期までなので、日向Ⅰb式の多くは関東第Ⅲ期に対比すべきであろう。一部は関東第Ⅱ期に平行すると思われる。日向Ⅰb式とされる土器については細分して考えなければならないであろう。さて、この日向Ⅰb式の土器には口縁部内側に隆線をもつ場合があり、一つの特徴と言えるであろう。関東に類似例があるのは知らない。最近報告された福島県高山遺跡には多条型の土器が見られるが、やはり口縁部内側に隆線をもっている<sup>84)</sup>。日向Ⅰb系統の土器であるが、日向Ⅰb系の南下として重要である。口縁部に「ハ」の字形爪形文をもつ1帯型の日向Ⅰc式土器<sup>85)</sup>は、山形県火箱岩洞穴の第Ⅳ層のやはり口縁部に「ハ」の字形爪形文をもつ1帯多条型の土器<sup>86)</sup>に対比されるであろう。火箱岩洞穴の下層である第Ⅴ・Ⅶ層から出土する隆起線文土器は日向Ⅰb式期に対比させるのが妥当であろう。従って、火箱岩第Ⅳ層の土器や日向Ⅰc式は関東第Ⅳ期に平行するであろう。同様に、山形県一ノ沢岩陰の資料<sup>87)</sup>もほぼ関東第Ⅳ期に平行するものと考えている。関東第Ⅳ期、あるいは隆起線土器の終末期、中部・関東・東北で1帯多条型や多条型の土器の文様の配し方に於いて、口縁部が特別な扱いになる点で共通した性格をもっていると考えている。それ以前の地域性を、ある意味で解消する新しい動きがあったのではなかろうか。

上記の火箱岩第Ⅴ層には数条横走する沈線文土器が伴い、胎土・焼成は同層の隆起線文土器に共通することが説かれていて<sup>88)</sup>注目される。日向Ⅰc式にもやはり沈線文土器が伴うとされている<sup>89)</sup>。一方関東地方では、花見山遺跡で新しいとされる隆起線文土器に「斜格子文土器」なる沈線文土器が伴出することが報じられている<sup>90)</sup>。橋立岩陰例(図2—5)も格子状の沈線をもつ土器で、花見山遺跡の沈線文土器の仲間と考えた方がいいのではなかろうか。隆起線文土器の終末近くには、隆起線文土器とは別種の土器が登場してくることを考えねばならないことを、これらの土器は示唆し

ている。

他にも隆起線文土器との平行関係を問題にしなければならない土器がある。

先に考察したように、酒呑ジュリナ遺跡は、多帯型のある大谷寺洞穴を介して石小屋洞穴に時期的にはほぼ平行するが、その酒呑ジュリナ遺跡には他に爪形文土器(図30-2)があり、石小屋洞穴の隆起線文土器(図1-2, 図8-10~11)を出す第Ⅷ層からは「ハ」の字形爪形文土器や爪形文土器があり、上層の第Ⅶ層にも爪形文土器がある(図8-1~9, 12~13)。第Ⅷ層の「ハ」の字形爪形文土器(図8-9, 12

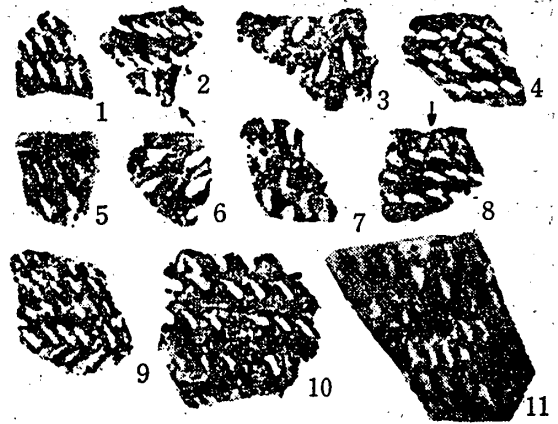


図31 曾根

~13)は、隆起線文土器群に於いての「ハ」の字形爪形文の存在の仕方を考えるとき、同層の隆起線文土器に伴うと考えるべきであろう。では、爪形文土器はどのようなのであろうか。長野県曾根遺跡<sup>91)</sup>の爪形文土器には別に「ハ」の字形爪形文を口縁部や胴部にもつ土器(図31-2, 8)があることが拓図を見るとわかる。この土器の爪形文自体は石小屋洞穴の資料に通じるものである。又、この曾根の爪形文土器によく対比される群馬県西鹿田遺跡の爪形文土器の口縁部に「ハ」の字形爪形文があることは、発掘した相沢忠洋が解説している<sup>92)</sup>。小瀬ヶ沢洞穴にも曾根の爪形文土器(図31-2)と同じものがある<sup>93)</sup>。

このように、「ハ」の字形爪形文が爪形文土器の口縁部や胴部に配される在り方は、隆起線文土器の中、例えば、日向Ⅰc式や火箱岩Ⅳ層の口縁部に「ハ」の字形爪形文をもつ土器があることや、花見山遺跡に「微隆線を数条と爪形文を一系列の組み合わせをくり返して、胴部まで文様がいたる」多帯型が在ることと無関係ではないであろう。少なくとも爪形文土器の一部はこれらの隆起線文土器と近い時期にあると考えている。爪形文土器の従来の編年の位置に関しては再考を要すると思う。

大谷寺洞穴には、円孔文土器に類似すると言われる土器<sup>94)</sup>(図5-11)や刺突文(爪形文)土器があり、当然、共伴関係が問題となる。

要するに、隆起線文土器以外の資料についても共時存在を点検していかなければならないのである。

関東第Ⅲ期以降、平行する各地で複雑な動きを想定できるようであり、詳細は別稿で論じたい。

## まとめ

従来言われて来た「ハ」の字形爪形文をもつ隆起線文土器の位置づけに対する再検討から、関東第Ⅰ期を設定するに至った。そして、この関東第Ⅰ期と各地との対比を試みて行くと、1帯型の検索・対比から、各地で古いとされている隆起線文土器の多くが関東第Ⅰ期に平行するようである。

### 隆起線文土器瞥見

九州方面では、1帯型が多く、多帯型、多条型の明確な例はない。福井洞穴に多い「隆帯文土器」は1帯型、多帯型、多条型とは別の範疇を形成していて、分布は今のところ九州に限られている。東北地方で「隆帯文土器」と呼ばれる田沢遺跡の土器は、多条型と考えている。この段階での多条型は、今のところ、この田沢例だけである。東北地方では他に1帯型があるが、多帯型はこの地方に比定できる例がない。つまり、1帯型とは違って、ある地方に偏在する型式がある。それらの出自も問題となる。従って、ほぼ平行するであろう各地の地域性を睥睨しなければならない。文様上の地域性の最たるものは、関東地方の「ハ」の字形爪形文であろう。他地域でこの文様が欠落していることが、より確かな編年対比を困難にしている。地域性について、さらに各地を見渡すと、関東第Ⅰ期には口唇の波状装飾や、ひねって出来る波状隆起線文など指先の利用と連関するものが残る。「ハ」の字形爪形文の起源を考える上で、これらが無関係とは思えない。東北地方にも口唇の装飾が発達し、隆起線作出にも指先が利用される例が多い。別の地域性を形成している可能性が高い。今後の資料の増加が待たれる。

一方、九州地方では施文技法の中に指を利用したつまむという技法はないようである。このことは、何人かの人々が唱えているように九州から北へ隆起線文土器が伝播していったとは考えにくいことを示唆しているのではなかろうか。九州地方の隆起線文土器施文技法体系の中には、関東地方の特徴的な施文技法を生み出す基盤はないと理解している。かかる地域性は各地方に於けるそれぞれの土器の出現にそれぞれ異なるファクターが関与していることを示すのであろう。すでに指摘されている先土器時代終末から縄文草創期にかけての石器インダストリーの地域的差異及び環境系の問題をも考えるならば、隆起線文土器の伝播（北上説）という解釈モデルはとりあえず清算してみるべきであろう。各地域での地域性が目立つことから、それぞれの地域性の由来の検討へ向うべきである。そして、これは当時の社会状況・集団関係の把握へ直接連なる課題である。

公表されている資料が少ないことから今回は充分にはなし得なかったが、九州では、泉福寺洞穴の豆粒文土器・隆起線文土器と、福井洞穴の「隆帯文土器」とのそれぞれの関係について、なお一層の型式学的分析が必要であろう。豆粒文土器は隆起線文土器とは別の型式と考えたい。

関東では、第Ⅰ期の資料を圧倒的多数出土した花見山遺跡の各種具体的な検討が関東第Ⅰ期の細分内容の充実とも関係して急務である。又、関東北的に見た場合、青森県大平山元Ⅰ・茨城県後野遺跡等での「無文土器」の存在に対する理解として、例えば岡本東三は「隆起線紋土器が全国一斉に出現する前段階の終末期には、土器をもつ集団、もたない集団が存在するという日本の中での凝縮された無土器現象があったのではないだろうか<sup>95)</sup>」と推察しているが、かかる仮説に対して、当地での隆起線文土器の型式学的編年研究、地域性の追究からの遡上が有効であると思われる。「無文土器」と隆起線文土器との系統関係の有無が気になるところである。

隆起線文土器出現時での問題とは別に、隆起線文土器の変容過程にも複雑な要因が潜んでいると考えられる。そのためにも、1帯型、多帯型、多条型各種型式の系列の細分及び連鎖が必須課題である。又、各系列の相互の交渉についても分析していかなければならない。特に隆起線文土器の終

末については、隆起線文土器以外の土器の存在についての配慮が必要となろう。

そろそろ紙数も尽きてきたので筆をおくことにするが、既出資料の点検が決して充分でないことを痛感した。拙稿もその譏りを免れ得ないことは承知している。翻って、かかる現状で“最古の土器”に血眼になっても生産的ではなからう。単純に縄文草創期の論点を古さに収束させるのではなく、その前に問題とすべき土器群について、土器型式としての系統的・時期的細分、地域性の実体などを踏えておくのも草創期研究の一つの方策であろうと私考している。(1982年1月31日脱稿)

本稿を草するに際して、上野佳也、藤本 強、安斎正人、今村啓爾、篠原 正、小川静夫、宮下健司、近藤 敏の諸先生、諸先輩、諸兄には色々ご教示いただきました。感謝の念に堪えません。

又、各地の資料の実見については、吉田 格、檜崎彰一、小林達雄、渡辺 誠、成田勝範、原川雄二、鈴木俊成、原田昌彦の諸先生、諸氏にご配慮いただきました。お礼申し上げます。

#### 註

- 1) 山内清男, 1969, 「縄文草創期の諸問題」MUSEUM, 第224号, 7頁
- 2) 佐藤達夫, 1971, 「縄文式土器研究の課題——特に草創期前半の編年について——」日本歴史第277号
- 3) 麻生 優, 1979, 「縄文文化の成立」歴史公論第5巻2号
- 4) 後野遺跡調査団編, 1976, 『後野遺跡』  
三宅徹也・岩本義雄, 1979, 『大平山元Ⅰ遺跡発掘調査報告書』
- 5) 岡本東三, 1979, 「神子柴・長者久保文化について」研究論集V(奈良国立文化財研究所学報)
- 6) 原川雄二, 鈴木俊成, 1981, 「多摩ニュータウン No.426 遺跡」『東京都埋蔵文化財センター調査報告第1集 多摩ニュータウン遺跡』第3分冊  
石器文化談話会編, 1981, 『座散乱木遺跡発掘調査報告書Ⅱ』
- 7) 小林達雄, 1963, 「長野県荷取洞窟出土の微隆起線文土器」石器時代第6号
- 8) 註(7)文献, 52頁
- 9) 小林達雄, 1977, 『日本原始美術太系一 縄文土器』講談社
- 10) 小林達雄, 1979, 『日本の原始美術① 縄文土器Ⅰ』講談社
- 11) 註(9)文献, 155頁
- 12) 註(2)文献
- 13) 註(2)文献, 108頁
- 14) 註(2)文献, 108頁
- 15) 岡村道雄, 1980, 「Ⅶ: 考察」『鹿原D遺跡』
- 16) 白石浩之, 1976, 「先土器終末から縄文草創期前半の尖頭器について(下)」考古学ジャーナル No.127
- 17) 麻生 優・白石浩之, 1978, 「泉福寺洞穴の第八次調査」考古学ジャーナル No.145, 12頁
- 18) 註(17)文献, 13頁
- 19) 鈴木保彦, 1977, 「縄文土器出現の様相」どるめん No.15
- 20) 註(19)文献, 100頁
- 21) 註(19)文献, 89頁
- 22) 註(10)文献
- 23) 永峯光一, 1968, 「石小屋洞穴発見の微隆起線文土器」古代文化第20巻第8・9号
- 24) 江坂輝彌・浅川利一・岡島 格, 1978, 「なすな原遺跡出土の細隆起線文土器」考古学ジャーナル No.147
- 25) 註(24)文献
- 26) 註(23)文献, 179頁
- 27) 芹沢長介・吉田 格・岡田淳子・金子浩昌, 1967, 「埼玉県橋立岩陰遺跡」石器時代第8号

## 隆起線文土器瞥見

- 28) 註(2)文献, 110頁
- 29) 小田静夫・伊藤富治夫・C・T・キリー編, 1976, 『前原遺跡』
- 30) 笠野 毅他, 1974, 「富士見市ハケ上遺跡の調査」第7回遺跡発掘調査報告会発表要旨
- 31) 塙 静夫, 1976, 「大谷寺洞穴遺跡」『栃木県史 資料編・考古一』
- 32) 塙 静夫, 1979, 「第二章 考古学上からみた宇都宮」『宇都宮市史』第1巻, 226頁
- 33) 村田文夫, 1968, 「神奈川県川崎市生田広福寺境内採集の隆起線文系土器片について」古代文化第20巻第2号
- 34) 註(3)文献, 44頁
- 35) 鈴木道之助, 1974, 「下総台地における縄文時代初頭の文化」史館第4号  
村田文夫, 1979, 「縄文時代草創期の土器・石器群の位置づけ」『黒川東遺跡』  
岡村道雄, 註(5)文献
- 36) 註(7)文献
- 37) 多摩線沿線地区埋蔵文化財発掘調査委員会編, 1978, 『栗木Ⅳ』
- 38) 安岡路洋他, 1977, 『小岩井渡場遺跡』
- 39) 鈴木重信・坂本 彰, 1978, 「横浜市花見山遺跡の調査」第2回神奈川県遺跡調査研究発表要旨
- 40) 註(9)文献, 5頁
- 41) 註(9)文献, 5頁
- 42) 鈴木道之助, 1974, 「瀬戸遠蓮遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
- 43) 註(9)鈴木文献, 7頁
- 44) 天野 努, 1974, 「地国穴台遺跡」『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
- 45) 註(9)鈴木文献, 20頁
- 46) 註(1)文献
- 47) なすな原近隣遺跡調査会編, 1978, 『なすな原近隣遺跡調査報告書』
- 48) 岡島 格, 1977, 「町田市なすな原遺跡の調査」調査・研究発表会Ⅱ発表要旨
- 49) 町田市立博物館編, 1977, 『多摩の縄文展』, 22頁
- 50) 大塚達朗・小川静夫・田村 隆, 1980, 「市原市南原遺跡第2次調査抄報」伊知波良4  
小報に於いて, 田村が有舌尖頭器について興味ある型式学的概括をしている。参照されたい。
- 51) 篠原 正, 1981, 「成井遺跡出土の隆起線紋土器」舌状台地創刊号
- 52) 註(6)原川・鈴木文献
- 53) 黒川東遺跡発掘調査団編, 1979, 『黒川東遺跡』
- 54) 註(9)文献, 5頁
- 55) 註(6)文献, 3頁
- 56) 註(6)原川・鈴木文献, 215頁
- 57) 註(5)文献, 1頁
- 58) 註(9)文献, 5頁
- 59) 註(9)文献, 5頁
- 60) 註(9)文献, 5頁
- 61) 篠原 正氏のご好意により報告書刊行以前に利用させていただいたものがある(図17-9~11)。図示した  
ものについてのみ観察所見を記す。
- 62) 以下の記述は筆者の観察所見である。
- 63) 坂本 彰, 1977, 「花見山遺跡の隆起線文土器」港北のむかし71付図より判断した。
- 64) 註(5)文献, 12頁
- 65) 註(1)麻生・白石文献  
麻生 優・白石浩之, 1979, 「泉福寺洞穴の第九次調査」考古学ジャーナル No.158
- 66) 註(5)1979文献
- 67) 鎌木義昌・芹沢長介, 1967, 「長崎県福井洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社
- 68) 鈴木重治, 1969, 「日本における発生期土器の地域相—九州地方」歴史教育第17巻第4号
- 69) 註(1)文献, 12頁

大塚達朗

- 70) 麻生 優・白石浩之, 1980, 「泉福寺洞穴の第十次調査」考古学ジャーナル No.172
- 71) キメラ的土器の土器型式上の意味については, 下記の論文を参照されたい。  
佐藤達夫, 1974, 「土器型式の実態—五領ケ台式と勝坂式の間—」『日本考古学の現状と課題』吉川弘文館  
大塚達朗, 1981, 「小豆沢出土安行3a式深鉢再考—三叉紋の系譜から」彌生 No.11
- 72) 江坂輝彌他, 1969, 「愛媛県上黒岩岩蔭遺跡第四次調査速報」考古学ジャーナル No.37
- 73) 澄田正一・安達厚三, 1967, 「岐阜県九合洞穴」『日本の洞穴遺跡』平凡社
- 74) 小林 孚, 1968, 「長野県上水内群信濃町久保遺跡緊急発掘調査概報」信濃第20巻第4号, 第5図—3
- 75) 佐々木洋治, 1973, 「山形県における縄文草創期文化の研究 I」山形県立博物館研究報告第1号参照
- 76) 註69文献参照
- 77) 芹沢長介・須藤 隆, 1968, 「新潟県田沢遺跡の発掘調査予報」考古学ジャーナル No. 27
- 78) 註69文献, 20頁
- 79) 註77文献, 8頁
- 80) 小林達雄編, 1980『壬遺跡』  
同, 1981, 『壬遺跡 1981』
- 81) 註6)石器文化談話会編文献, 59頁
- 82) 大参義一, 1970, 「酒呑ジュリソナ遺跡(2)」名古屋大学文学部研究論集L史学17
- 83) 中村孝三郎, 1960, 『小瀬ヶ沢洞窟』
- 84) 寺島文隆・根本信孝, 1981, 『高山・南堀切遺跡』, 第16図—1, 3
- 85) 佐々木洋治, 1971, 『高島町史』考古資料編, 図版第115図その2
- 86) 柏倉亮吉・加藤 稔, 1967, 「山形県下の洞穴遺跡」『日本の洞穴遺跡』平凡社, 図版15—5~7
- 87) 加藤 稔・佐々木洋治, 1962, 「山形県—ノ沢岩陰遺跡」上代文化第31・32輯
- 88) 加藤 稔, 1969, 「縄文時代(I)—草創期・早期」『山形県史』資料篇11, 43頁
- 89) 註79文献, 54頁
- 90) 註89文献, 5頁
- 91) 山幡一郎, 1936, 「信州諏訪湖底『曾根』の石器時代遺跡」ミネルヴァ第1巻第2号
- 92) 相沢忠洋, 1980, 『赤土への執念』佼成出版社, 34頁
- 93) 註83文献, 図版16—16
- 94) 麻生 優・岡本東三・加藤晋平・永峯光一・林 謙作・小林達雄, 1980, 「縄文土器の起源」国学院雑誌第81巻第1号, 44頁
- 95) 註5)文献, 22頁

図の出典

図1—1~2: 註10) 文献, 図2—1~9: 註27文献, 図3: 註29) 文献, 図4—1~5: 註30) 文献, 図5—1~11: 註31) 文献, 図6—1~3: 註32) 文献, 図7: 註33) 文献, 図8—1~13: 『日本の洞穴遺跡』平凡社, 図9—1~9: 註7) 文献, 図10: 註37) 文献, 図11—1~10: 註38) 文献, 図12—1~21: 註42) 文献, 図13—1~18: 註44) 文献, 図14—1~3: 註47) 文献, 図15—1~11: 『神奈川県史資料編20 考古資料』, 12~13: 岡本東三編『日本の美術2』縄文時代I(早期・前期)至文堂, 図16—1~16: 註50) 文献, 図17—1~4, 9~11: 筆者拓図, 5~8, 12~14: 註51) 文献, 図18—1~5: 註53) 文献, 図19—1~14, 図20—1~15: 註6) 原川・鈴木文献, 図21—2~14: 註17) 文献, 図21—1, 図22—1~16: 註65) 1979文献, 図23, 図25, 図26: 芹沢長介編『古代史発掘1 最古の狩人たち』講談社, 図24: 『日本の洞穴遺跡』平凡社, 図27: 岡本東三編『日本の美術2』縄文時代I(早期・前期)至文堂, 図28: 註6) 石器文化談話会編文献, 図29: 註83) 文献, 図30—1~2: 註82) 文献, 図31—1~11: 註91) 文献